千葉県千葉市

舌　田　遺　跡

―　第３次発掘調査報告書　―

2009
千　葉　市　教　育　委　員　会
有限会社勾玉工房Ｍｏｇｉ
株　式　会　社　拓　匠　開　発

千葉県千葉市

舌　田　遺　跡

―　第３次発掘調査報告書　―

2009
千　葉　市　教　育　委　員　会
有限会社勾玉工房Ｍｏｇｉ
株　式　会　社　拓　匠　開　発

例　言

１．本書は、千葉県千葉市若葉区高品町 195-6 他に所在する舌田遺跡第３次の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は株式会社拓匠開発による宅地造成に伴う事前調査として実施し、事業者の協力を得て千葉市教育委員会が行った。なお、発掘調査から報告書に至る業務に当たっては、事業者の委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が業務を支援した。

３．調査は、平成 21 年４月 22 日から同年６月 15 日まで実施し、調査面積は 1,200㎡である。

担当者：白根義久（千葉市教育委員会）長谷川秀久（勾玉工房 Mogi）田中暁穂（勾玉工房 Mogi）

４．本書の執筆・編集は長谷川・白根が担当し白根が総括した。

５．古墳主体部から出土した鉄製品は、（財）千葉県教育振興財団に X 線撮影を依頼した。

６．調査参加者は以下のとおりである。

海老原龍生　斉藤京子　斉藤与志朗　高野正行　中村　薫　中島トミ子　中島貞雄　平林敬子

山崎一義　吉田みち　渡辺由美子

７．調査記録及び出土遺物の整理は、平成 21 年７月１日から同年７月 31 日まで行った。

８．整理調査の参加者は以下のとおりである。

大賀さつき　大賀智章　川口和之　宇佐美薫　木村春代　岩谷大吾　根本時子　岩崎美奈子

小山郷子　大賀文香

９．発掘調査で得られた出土遺物及びその他の資料は、千葉市埋蔵文化財調査センターで保管している。

10．発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸氏、諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。

（財）千葉県教育振興財団　（財）千葉市教育振興財団　加藤修司　横田正美　湖口淳一　宮内克己　佐藤雅之　林田利之（有）カワヒロ産業　（株）スカイサーベイ　芦田測量　高品町町内会　（有）カメラのスギハラ（株）エイティー

凡　例

１　本書の作成にあたり、第１図に用いた地図は国土地理院発行２万５千分の１『千葉東部』を用いた。

２　座標値は日本測地系第Ⅸ系を使用した。全体図、遺構図の方位は座標北を示し、高さの数値は標高を示している。

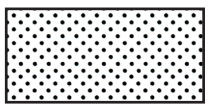
３　土層説明および遺物の観察には『新版　標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) を参考にしている。

４　掲載した図面は以下の縮尺で掲載した。

遺構図　　古墳の全体図 1/150、古墳セクション 1/100、主体部 1/25、溝・土坑・道セクション 1/40

出土遺物　土器・陶磁器・石製品 1/3、鉄製品 1/2

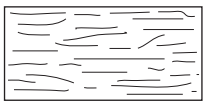
５　掲載図面中のスクリントーンは、次の内容を示す。



トレンチ設定範囲
繊維混入土器・焼土範囲

粘　土

旧表土面



木質部

６　遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。

目　次

本文目次

例　言

凡　例

第１章　調査に至る経緯……（1）

第２章　遺跡の位置と考古学的環境……（1）

第３章　調査の方法と経過

　第１節　調査の方法……（4）

　第２節　調査経過……（5）

　第３節　標準堆積土層……（6）

第４章　検出された遺構と遺物

　第１節　縄文時代……（7）

　第２節　弥生時代……（10）

　第３節　古墳時代……（10）

　第４節　中・近世……（17）

第５章　まとめ ……（22）

　引用・参考文献

　写真図版

　抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……（2）

第２図　遺跡の立地と調査区……（3）

第３図　グリッド配置図……（4）

第４図　標準堆積土層図……（6）

第５図　１号土坑……（7）

第６図　２号土坑……（7）

第７図　縄文土器……（9）

第８図　弥生土器……（10）

第９図　古墳全体図……（折図１）

第10図　古墳断面図……（折図２）

第11図　墳丘盛土内出土遺物……（11）

第12図　主体部実測図……（12）

第13図　主体部出土遺物……（14）

第14図　墳丘下祭祀遺構……（16）

第15図　墳丘下祭祀遺構遺物……（16）

第16図　溝セクション……（18）

第17図　道セクション……（20）

第18図　土坑セクション……（20）

第19図　遺構外出土遺物……（21）

写真図版目次

図版１　１　遺跡遠景（南から）
　　２　遺跡全景
図版２　１　墳丘表土除去状況（北から）
　　２　周溝西側検出状況
　　３　周溝北側検出状況
　　４　周溝東側検出状況
　　５　北側周溝セクション
図版３　１　墳丘立ち割り状況（西から）
　　２　墳丘立ち割り状況東側セクション
　　３　墳丘立ち割り状況南北方向
　　４　墳丘立ち割り状況東西方向
　　５　盛土除去状況
図版４　１　主体部セクション
　　２　主体部埋葬部分全景
　　３　主体部全景
　　４　直刀出土状況
　　５　鉄鏃出土状況
図版５　１　主体部刀子出土状況
　　２　主体部北側粘土充填状況
　　３　主体部南側粘土充填状況
　　４　粘土裏込立ち割り状況
　　５　主体部完掘状況
図版６　１　墳丘下祭祀遺物出土状況
　　２　同　遺物出土状況
　　３　１号土坑完掘
　　４　２号土坑セクション
　　５　２号土坑完掘
図版７　１　３号土坑完掘
　　２　４号土坑炭化物検出状況
　　３　４号土坑完掘
　　４　５号土坑完掘
　　５　１号道確認状況
　　６　１号道完掘
　　７　２号道完掘
　　８　１号溝完掘
図版８　１　２号溝完掘
　　２　３号溝完掘
　　３　４号溝完掘
　　４　５号溝完掘
　　５　６号溝確認状況
　　６　墳丘調査状況①
　　７　墳丘調査状況②
　　８　周溝セクション実測状況
図版９　縄文・弥生土器、墳丘盛土内出土遺物
図版 10　主体部出土遺物
図版 11　墳丘下祭祀遺構出土遺物、近世出土遺物
図版 12　鉄製品 X 線写真

財団法人　千葉県教育　財団提供

第１章　調査に至る経緯

平成２１年２月６日付けで株式会社拓匠開発から宅地造成を計画している千葉市若葉区高品町１９５－１１ほか（面積 3,433.05㎡）について「埋蔵文化財発掘の届出について」の文書が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。

届出地を含む一帯は、縄文時代、古墳時代、中世の集落跡である舌田遺跡に該当しており、届出地内には古墳１基が確認され、また西側隣接地では平成４年度に確認調査を実施し、その結果、古墳主体部や中世の造成区画跡等が確認され、その結果にもとづき、平成 18 年度に本調査を実施しているため、千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課では、平成２１年２月２５日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう指示した。

その後、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、宅地造成に先立ち発掘調査を実施して記録保存の措置を講じることとなり、平成２１年３月１７日から平成２１年３月２７日まで財団法人千葉市教育振興財団が確認調査を実施し、その結果をもとに事業者あてに届出地のうち 1,200㎡について本調査が必要との回答を通知した。その後、事業者の協力を得て、千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課が平成２１年４月２２日から平成２１年６月１５日まで本調査を実施した。

第２章　遺跡の位置と考古学的環境　（第 1･2 図、図版 1）

千葉県の北西に位置する千葉市は、様々な河川に開析された下総台地とその沖積地が南西に広がる。本遺跡はその下総台地の南端、千葉市若葉区高品町に所在し、JR 千葉駅の北東約 2.5㎞に位置する。

本遺跡周辺の地形をみると西側 1㎞において都川の支流である葭川が南流し、遺跡北西側を流れる支流と合流する。そして、この支流により形成された東寺山支谷と遺跡東側を南流する都川の支流により形成された高品支谷の間に挟まれて、形態や突出の方向を変化させながら貝塚台地と平行するように高品台地が形成されている。遺跡が所在する高品台地の標高は約 25m で台地先端の南東から北西へ徐々に傾斜している。また遺跡南側は切岸となっており、人の侵入を拒む地形が形成されている。旧小字名を確認すると、この台地の南側に入り組むように形成された谷津部分が舌田、台地上は小向となっており、谷津の利用状況や城に関連して命名されていることがわかる。そうした地形の利用状況の中で舌田地区の台地縁辺周辺では旧くから主として集落が営まれている。

今回の調査はこの舌田遺跡の第３次調査である。第１次調査は平成 18 年 10 月、さらに２次調査は平成 21 年に実施している。１次調査で検出された古墳石室の痕跡と、今回の調査の主体となった古墳との関連が想定される。今回の調査を含め２基の古墳は東寺山戸張作遺跡 (22) の古墳群と近接した位置関係にあり、特に関連が想定されるものである。一方で、高品城との関連は１次調査同様、明確にすることはできていない。

周辺の歴史的環境については報告書『千葉市高品城跡Ⅰ』に詳しいので、ここでは概略を述べるにとどめる。

本遺跡周辺の台地上は遺跡の宝庫で様々な遺跡が確認・調査されている。本遺跡 (1) の位置する台地上では高品城跡 (2)、本郷遺跡 (3)、舌田西遺跡 (4)、西向遺跡 (5)、南台遺跡 (6)、キツ長南遺跡 (7) がある。相対する貝塚台地、殿台台地には国指定史跡の荒屋敷貝塚 (8)、草刈場貝塚 (9)、台門貝塚 (10) などの馬蹄形貝塚を有する遺跡の他、東辺田遺跡 (11)、荒屋敷西貝塚 (12)、向ノ内貝塚 (13)、貝堤遺跡 (14)、東寺山貝塚 (15)、前田貝塚 (16)、作草部貝塚 (17)、廿五里遺跡 (18)、廿五里北遺跡 (19) など多数の貝塚遺跡が所在し、貝塚以外にも車坂遺跡 (20)、木戸場遺跡 (21)、戸張作遺跡、海老遺跡 (23)、石神遺跡 (24)、西前原遺跡 (25)、山王

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25000)

遺跡 (26)、台畑遺跡 (27)、稲毛台東遺跡 (28)、稲毛台北遺跡 (29)、稲毛台遺跡 (30)、堀込遺跡 (31)、小満遺跡 (32)、高津辺田遺跡 (33)、南屋敷遺跡 (34)、殿山堀込遺跡 (35)、餅ヶ崎遺跡 (36) などが知られる。葭川を挟んでは、五味の木遺跡 (37)、小山遺跡 (38)、根崎遺跡 (39)、駒形遺跡 (40)、宮後遺跡 (41)、新畑遺跡 (42) などが所在する。本調査区に隣接する位置には古墳も周知されており、戸張作遺跡、稲毛台東遺跡、根崎遺跡、新畑遺跡、東田遺跡、高品第 2 遺跡の古墳の他、満賀田古墳群 (43)、西ノ台古墳 (44)、浜道古墳群 (45)、駒形古墳 (46)、大塚古墳群 (47)、天神台古墳 (48) などが知られる。中・近世の遺跡としては高品城跡の他に戸張作遺跡、浜道遺跡、南屋敷遺跡、廿五里遺跡、台畑遺跡、殿台城跡 (49) などが周知されている。

第 2 図　遺跡の立地と調査区

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法（第３図）

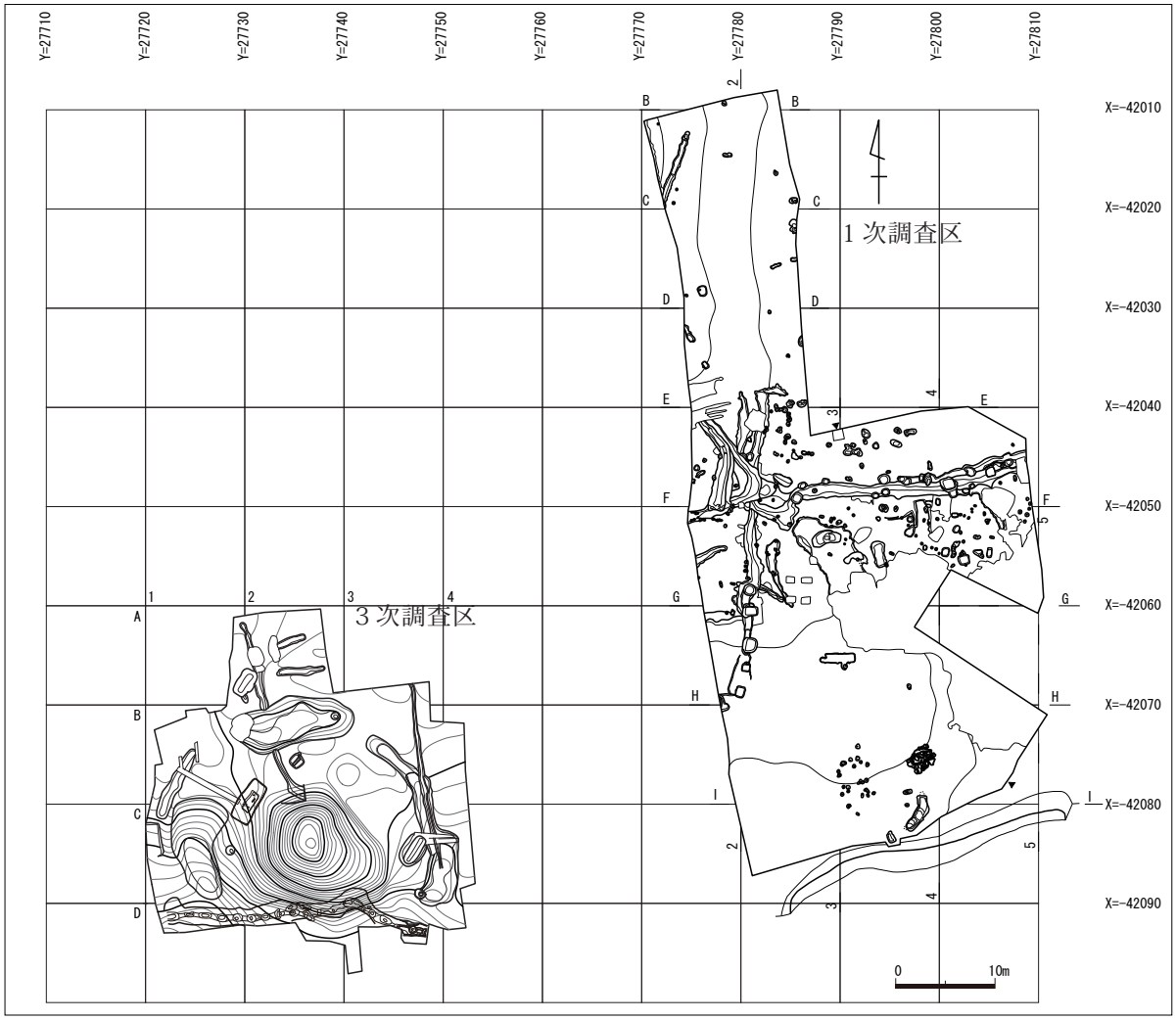
本遺跡は舌田遺跡第１次調査区の西側に隣接するもので、本遺跡の調査時点では第１次調査区はすでに削平され、崖となっていた。（財）千葉市教育振興財団による確認調査（第２次調査）のトレンチが設定されて古墳の規模が想定されていた。この試掘調査において、古墳１基と土坑数基が検出されたことより本調査区域の確定が行われた。

基準となる杭は日本測地第Ⅸ系を用いて設定し、第１次調査との整合を図った。グリッド杭は 10m の方眼で打設し、標高はベンチマーク１か所（標高 24.500m）を設定した。

表土は墳丘部分を除き、重機を用いて除去した。地目が山林であったために、抜根が不可能なものについては除去せずに、調査を進めた。

実測作業は平板測量・トータルステーションを用い、縮尺は遺構平面図・セクション・エレベーションは 20 分の 1、遺物出土状況図は 10 分の 1 を主に、全体図は 100 分の 1 で行った。写真撮影は小型及び中型カメラを使用し、フィルムは ISO100 の 35㎜モノクロ及び、リバーサルフィルム、120 ミリモノクロフィルムを用い、状況に合わせて適宜撮影した。補助として 700 万画素のデジタルカメラを使用した。

古墳の調査は表土層を鋤簾で除去後、墳頂部分から徐々に掘り下げを進めたが主体部の確認に至らなかったために、墳丘に対して放射状に A~H の８本のトレンチを設定し、盛土を掘り下げた。また、このトレンチで



第３図　グリッド配置図

も主体部が確認されなかったために全ての盛土を除去した。この結果、盛土の下部より墳丘構築前に実施したと想定される祭祀に使用された遺物の出土が確認された為に、盛土下の祭祀遺構の調査を実施した。

その後、祭祀遺構の西側で主体部が確認され、この主体部についての調査を実施した。なお、主体部の覆土は全て採取し２ミリメッシュの篩で水洗を行っている。

遺構の全景写真は、古墳の周溝の調査が終了した段階で、古墳の墳丘調査に入る前に航空写真で撮影を実施した。終了状況写真は、脚立を用いている。

第２節　調査の経過

①　発掘調査

平成21年４月21日調査前周辺挨拶を行う。

22日機材の搬入を行い、調査に着手する。

22日～24日　重機による表土除去

25日　遺構確認作業を実施する。これに並行して現況墳丘の測量を実施する。

５月上旬　　調査区内の木の根抜根作業並びに遺構確認を進める。

12日　遺構検出状況の写真撮影を行う。また、周溝のセクション実測並びにセクションの写真撮影を実施する。

13日　各遺構の掘り下げを開始する。

26日　周溝の掘り下げを完了し、空撮を実施する。

27日　墳丘の立ち割りを開始する。Ａ～Ｈトレンチ。

６月９日　墳丘の除去作業に取り掛かる。

10日　墳丘の除去作業を完了する。墳丘下祭祀遺構の調査を開始する。

11日　祭祀遺構の調査を終了。主体部を確認する。同日より主体部の調査を開始する。

６月15日　主体部の調査を終了する。同日遺跡調査終了状況の全景写真を撮影し、作業を終了する。同日終了確認及び現地の引き渡しを行い、調査のすべてを終了する。

②　整理調査

平成21年７月１日　整理作業を開始する。遺物の水洗い・注記作業を開始。

上旬　　遺構図面台帳作成、遺物台帳の作成　遺物実測を行う。

中旬　　遺構・遺物のトレースに取り掛かる。

下旬　　遺構トレース継続、遺物トレース終了。遺物写真撮影終了。

８月上旬　　遺物並びに遺構原稿を執筆開始する。

11日　千葉県教育振興財団に直刀・鉄鏃・刀子のＸ線撮影を依頼する。

20日　遺構原稿終了。

25日　入稿

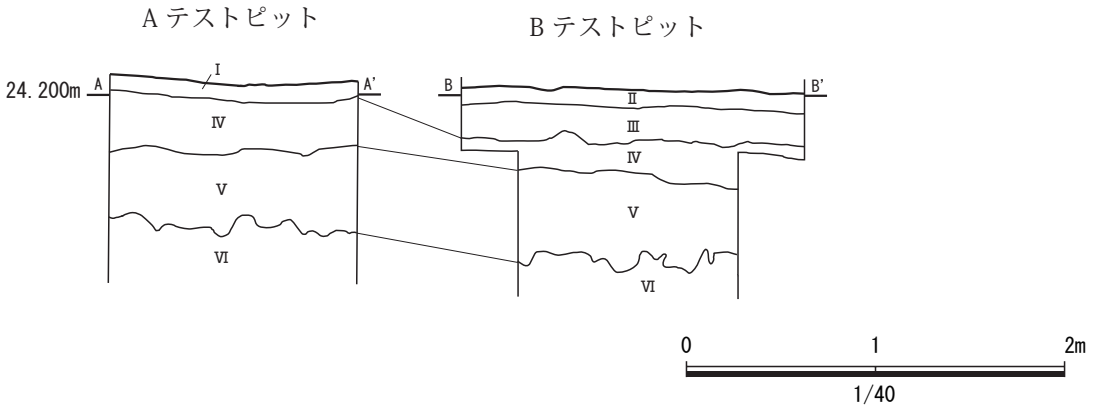
第３節　標準堆積土層（第４図）

本遺跡における標準堆積土層の観察はB1グリッドの調査区域の壁部分で、A－A'、古墳墳丘下のEトレンチ南壁の墳丘直下B－B'で行った。

遺跡内の土層はAテストピットに見られるように、表土直下に褐色のローム漸移層が堆積し、地目が山林であったためにⅠ層は腐葉土で、明瞭な耕作痕も確認できていない。以下はソフトロームからハードローム層に移行する。一方で、古墳の盛土の下には旧表土面の下に褐色の粒子を多量に含む富士新規テフラ層が確認されており、古墳築造時の堆積状況を示すBテストピットとは明瞭な差異が認められる。

このことは、本地域が古墳時代以降近世までの間に何らかの要因で削平を受けたことが想定される。第１次調査における標準堆積土層はむしろAテストピットに近似するもので、同様の開削が想定される。

Ⅳ層以下のロームは立川ロームの上部と判断される。



Ⅰ	7.5YR2/2	黒褐色土	ローム多量。腐葉土（現表土）
Ⅱ	7.5YR2/2	黒褐色土	ローム・黒褐色土多量（古墳墳丘下旧表土）
Ⅲ	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム・黒褐色土極多量（富士新規テフラ層）
Ⅳ	7.5YR4/4	褐色土	ローム多量、黒褐色土極微量。ローム漸移層。
Ⅴ	7.5YR4/3	褐色土	ソフトローム。
Ⅵ	7.5YR5/6	明褐色土	ハードローム層。

第４図　標準堆積土層図

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代

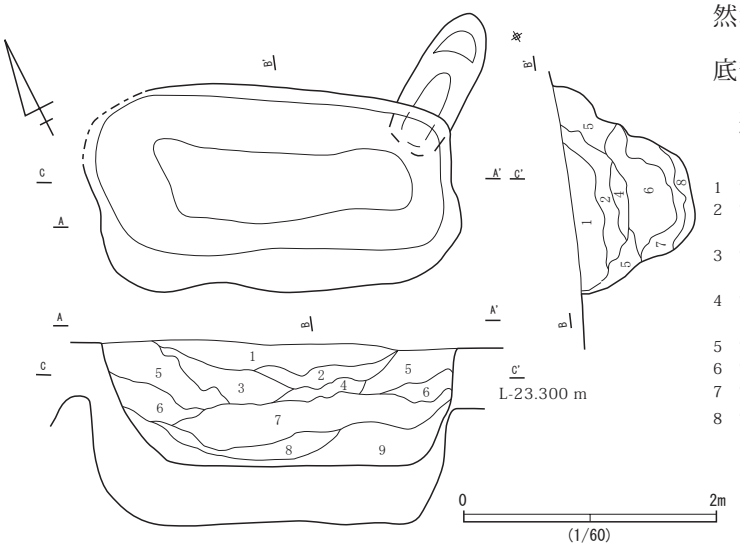
第１項　遺構

本遺跡に於いて検出された縄文時代の遺構は陥穴２基である。１号・２号土坑共に長軸方向がほぼ同じであり、地形に沿った構築がなされているものと思われる。遺物はない。ただし周辺から出土している縄文土器は前期の遺物が主体を占めるもので、該期の遺構である可能性もある。

１号土坑（第５図、図版 6-1）

平面形状は長方形を呈す。上端部の長軸は 2.9m、短軸 1.6m、掘り込みは確認面より 1.0 mを測る。主軸方向はＮ－ 30°－Ｅとなる。断面形状は逆台形状を呈し、中段に幾分くびれを持つ。覆土は９層に分層され自然堆積を示している。逆茂木などの痕跡は無く、底部にピットも存在しない。

遺物は出土していない。



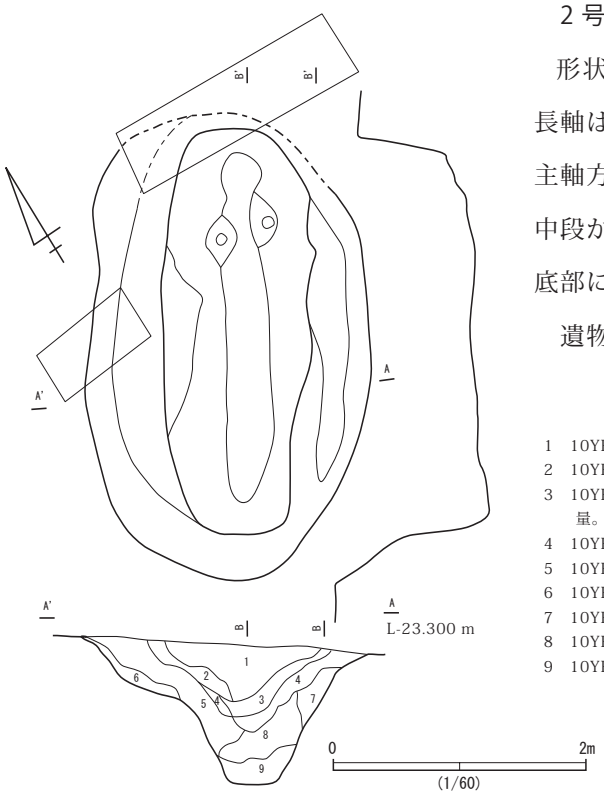
1　7.5YR2/2　黒褐色土　ローム粒多量。しまりあり。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒微量。黒褐色土ブロック（～30mm）多量。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒・黒褐色土極微量。暗　褐色土ブロック極微量。しまりあり。
4　7.5YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック多量。炭化粒極微量。　暗褐色土ブロック中量。しまりあり。
5　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒中量。黒褐色土多量。
6　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒多量。黒褐色土中量。
7　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土ブロック中量。
8　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒･ブロック（～ 30mm）多量。黒褐色土少量。

第５図　１号土坑

２号土坑（第６図、図版 6-4・5）

形状は楕円形を呈す。北端部をトレンチにより削平される。長軸は確認部分で 3.4 m、短軸 2.3 m、掘り込みは 1.2 mを測り、主軸方向はＮ－ 32°－Ｅとなる。断面形はほぼロート状を呈し、中段から急激に狭まる。覆土は９層に分層され自然堆積を示す。底部にピット状の掘り込みを２基検出する。

遺物は出土していない。



1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒中量。焼土粒極微量。しまりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒微量。
3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土ブロック中量。しまりあり。
4　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒･ブロック極多量。黒褐色土ブロック中量。
5　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。
6　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。
7　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。
8　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。
9　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量

第６図　２号土坑

第２項　遺構外出土縄文土器（第７図、図版９）

本遺跡で検出された縄文土器は 65 片で、総重量は 1,228.8 ｇである。このうち早期が３点、前期初頭が１点、前期後半が 48 点、中期前半が３点、後期が 10 点である。前期の割合が高く 75％を占める。掲載遺物は 30 点である。以下のように群類別した。

第１群土器　縄文早期

第１類　条痕文系土器

第２群土器　縄文前期

第１類　花積下層式土器

第２類　浮島式土器

第３類　諸磯式土器

第３群土器　縄文中期

第１類　下小野式土器

第４群土器　縄文後期

第１類　加曾利Ｂ式土器

第１群土器　縄文早期

第１類　条痕文系土器（1・32）

本遺跡で検出された縄文早期の土器は２点である。出土地点はいずれも１号古墳の墳丘盛土内からの出土である。

２点について掲載した。１は内外面に横方向の条痕を施文するもので、胎土中の繊維は微量である。32 は同じく条痕文系土器である。平底の底部で内面のみに条痕が施文されている。繊維の混入はやはり微量である。大形の底部及び繊維の混入量が微量であることより、条痕文系土器でも後半の茅山下層式以降の可能性が高い。

第２群土器　縄文前期

第１類　花積下層式土器（2）

２は胎土中に繊維を混入し、胴部下半の資料である。底部が緩やかな尖底になる可能性がある。器面には０段多条の縄文が縦方向に施文される。花積下層式でも古段階に相当するものであろう。

第２類　浮島式土器（3 ～ 11・13 ～ 23）

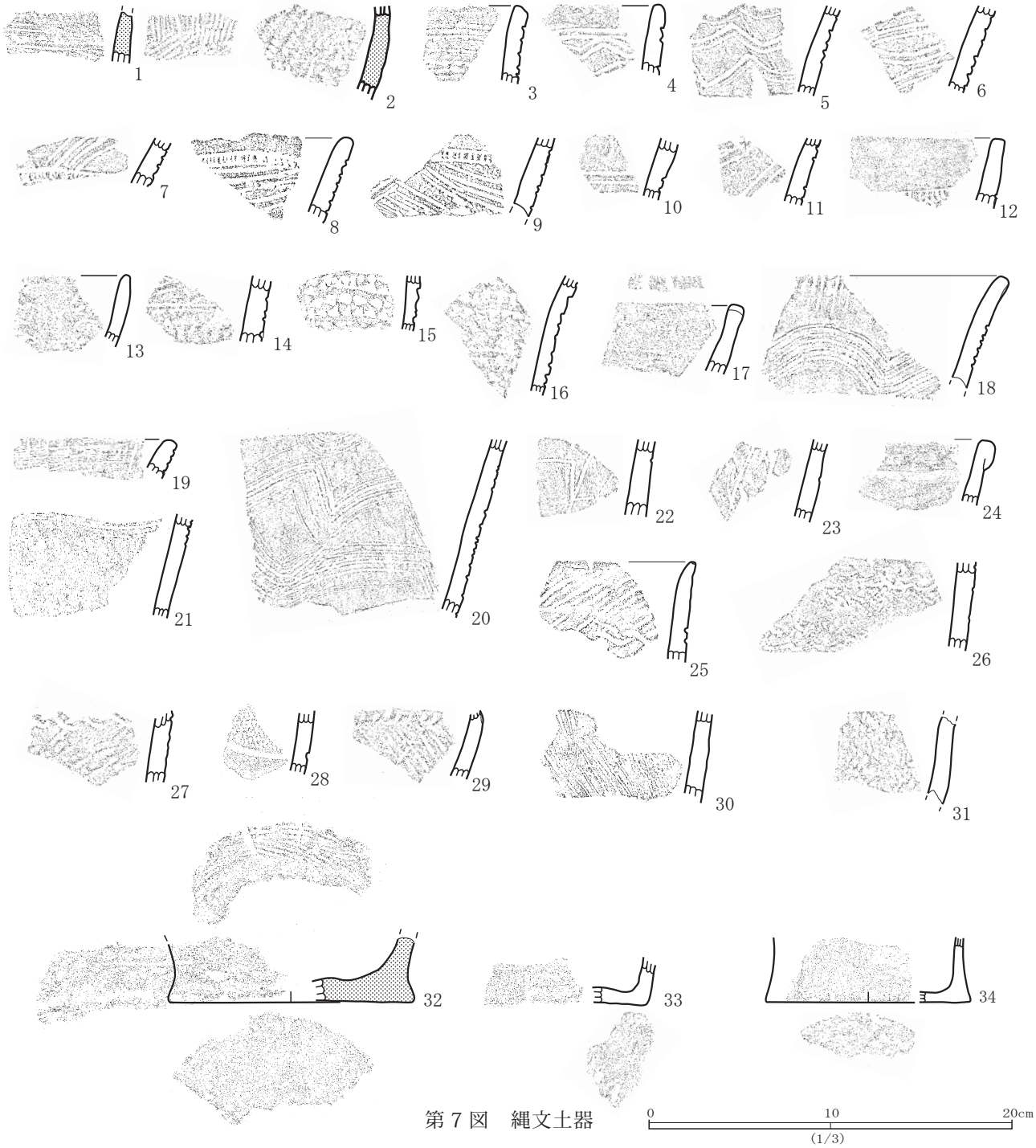
3 ～ 11 は地文に撚り糸が施文され、半截竹管による平行沈線でメガネ状や肋骨文が描かれるものである。浮島１式段階の資料である。13・14 は胴部に貝殻復縁による鋸歯文が描かれる遺物で、14 には変形爪形文が施文される。浮島２式段階である。

15・16 は三角形連続文が施文されるものである。浮島３式である。

17 ～ 21 は同一個体と判断される資料で内外面共に磨かれて焼成も良好である。半截竹管により平行沈線が波状に描かれる。22・23 は鋭い沈線による幾何学もしくは格子目状の文様がやや粗雑に描かれる。胎土・焼成より浮島３式と判断した。

第３類土器　諸磯式土器（12）

12 は口縁部無紋帯の下に爪形文が配される。諸磯ｂ式土器と判断した。



第７図　縄文土器

第３群土器　縄文中期

第１類　下小野式土器（24 ～ 27）

24 ～ 27 は中期前半の土器である。24 は口縁部が無文で折り返し口縁で角頭状になる。25 ～ 27 は胴部にＲＬの単節縄文が施文されるもので、縄文の間にはＳ字結節文が横方向に施文される。下小野式土器と判断した。33・34 は本群の底部と判断される。

第４群土器　縄文後期

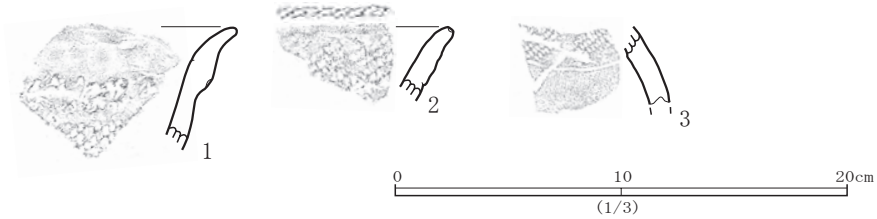
第１類　加曾利Ｂ式土器（28 ～ 31）

28 は曲線により区画された内部にＬＲの単節縄文が充填される。加曾利Ｂでも後半段階と判断される。29・30 は瓢形の土器の屈曲部の破片である。刻目を有し、沈線による条線が斜め方向に描かれる。加曾利Ｂ式でも後半段階になる。31 は単節縄文がまばらに施文される。内面は磨かれている。やはり加曾利Ｂ式の範疇でとらえた。

第２節　弥生時代　（第８図、図版９）

遺構の検出はない。弥生土器は３片が調査区内より出土している。表採、墳丘盛土内、5号溝覆土からの出土で、特に集中は認められない。検出遺物のすべてを掲載した。出土遺物の総重量は 55.6g である。

検出された遺物は３点ともに後期臼井南式の土器である。１は折り返し口縁で、折り返し部分に刺突列。胴部には縄文ＬＲが施文される。２は折り返し口縁である。口唇端部及び口辺部に無節Ｌの縄が施文される。３はハケ整形の後、沈線区画内に単節ＬＲ縄文が充填される。３はハケ整形が行われることにより、終末期の資料と想定される。



第８図　弥生土器

第３節　古墳時代

第１項　概要

本遺跡で検出された当該期の遺構は古墳１基である。本遺跡の調査の契機となった遺構で、調査前から円形の古墳として認識されていたものである。（財）千葉市教育振興財団が実施した確認調査の結果では、４方向に設定したトレンチに周溝が検出され、円形で周溝内壁下端間で 20 メートルを超す比較的規模が大きい円墳と想定されていた。以下古墳の説明を墳丘、周溝、主体部の順に行う。

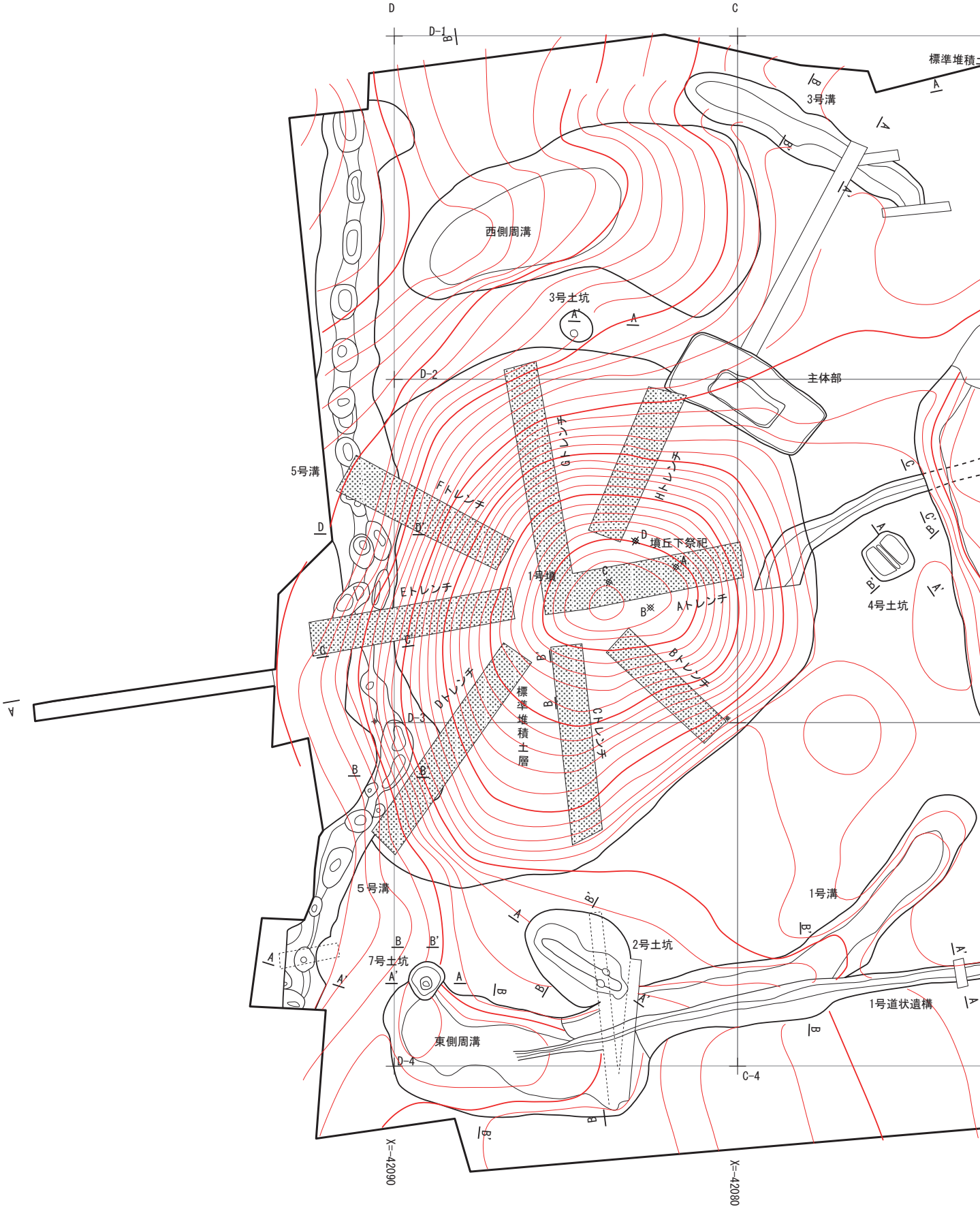
第２項　墳丘（第９・10 図、図版２・３）

現況は山林で、墳丘の形状はやや楕円形を呈し、現地表面より 1.3m の盛土が確認されていた。現況測量の結果、古墳は大きく削平されているものと想定された。墳丘の掘り下げは十字に１ｍのベルトを設定して掘り下げを進めた。墳丘頂上から鋤簾により徐々に掘り下げたが、墳頂部に主体部を確認することはできなかった。

トレンチの最下部で黒色の水平堆積を確認し、旧表土面が明瞭に観察されている。墳丘の規模はＡトレンチ部の北側部周溝下端より南側部周溝下端までの距離は 22.5 ｍ、東西は 23 ｍを測る。盛土は中央部分に向かって刺身状に盛られており、水平の堆積は行われていない。分層は 76 層に及んだ。旧表土面から現況の墳頂最高部の比高は 1.7m を測る。

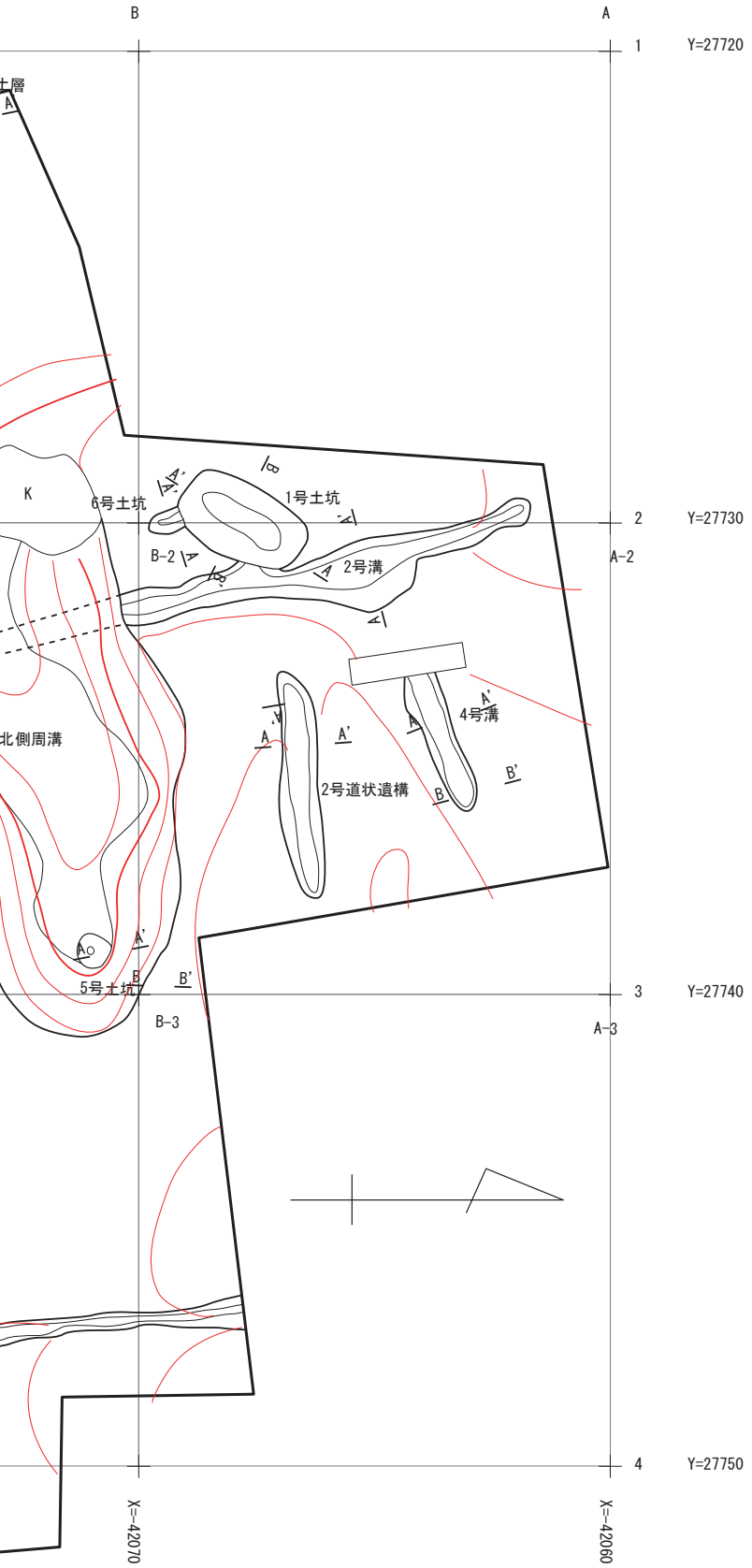
墳丘から出土した遺物は、表土付近では、近世から古代の資料も混入しており、墳丘自体様々な時代に祭祀的な場所として用いられた痕跡を示している。さらに、墳丘の北側は周溝までの間に 4.3m ほどの平坦部が広がっており、この部分の盛土は後世の削平により削り取られたものと判断される。

墳丘内出土遺物は縄文・弥生時代の遺物を除き第 11 図にまとめた。いずれも出土地点は墳丘盛土の上層からの出土である。


D
C
D-1
D-2
D-3
D-4
C-4
標準堆積土層
3号溝
西側周溝
3号土坑
主体部
5号溝
Fトレンチ
Gトレンチ
Hトレンチ
Kトレンチ
D
墳丘下祭祀
1号墳
C
B
Aトレンチ
Eトレンチ
Bトレンチ
Dトレンチ
Cトレンチ
標準堆積土層
4号土坑
5号溝
1号溝
2号土坑
7号土坑
東側周溝
1号道状遺構
X=-42090
X=-42080

第 9 図

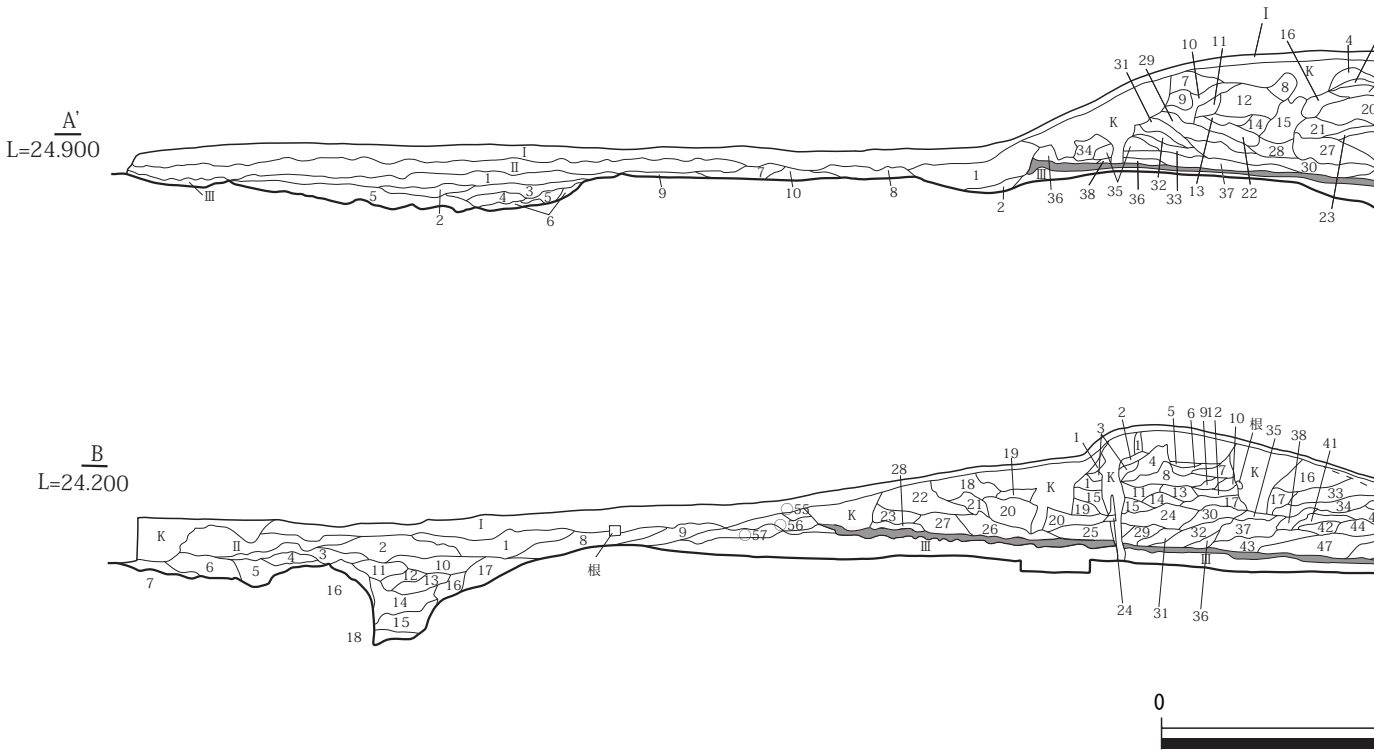
一折図



0 5 10m

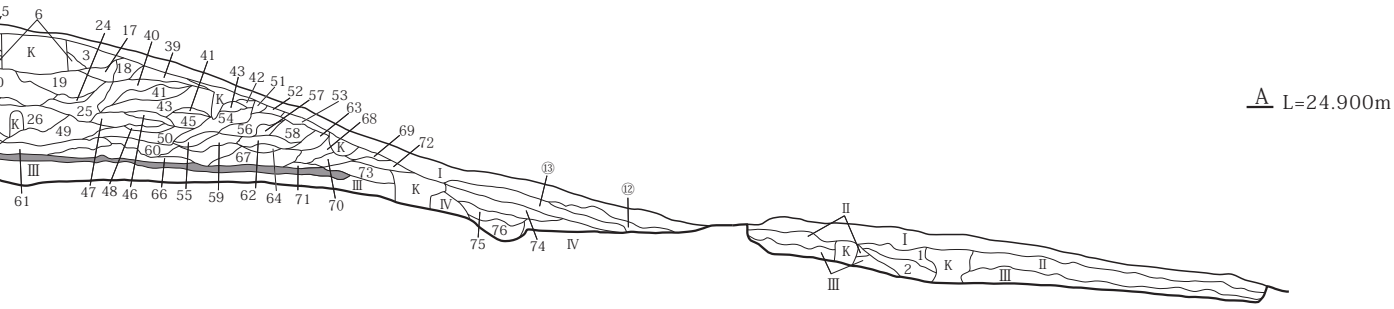
(1/150)

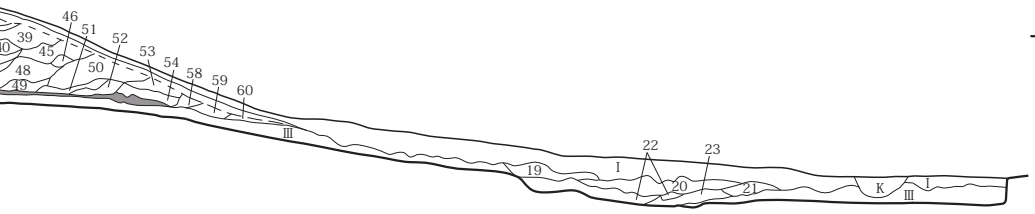
全体図



1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。暗褐色土ブロック（～30mm）中量。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。焼土粒極微量。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土ブロック微量。
4　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。
5　7.5YR 2/2　黒褐色土　ローム粒多量。焼土粒少量。炭化粒微量。
6　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。焼土粒微量。炭化粒極微量。黒褐色土ブロック少量。
7　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。
8　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。炭化粒極微量。黒褐色土ブロック微量。
9　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒微量。
10 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック微量。
11 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極微量。黒褐色土ブロック極微量。
12 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土ブロック多量。
13 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。暗褐色土ブロック中量。しまりあり。
14 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土多量。しまりあり。
16 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土中量。しまりあり。
17 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒中量。焼土粒極微量。
18 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。
19 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒多量。暗褐色土ブロック多量。
20 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土ブロック中量。
21 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。黒褐色土微量。
22 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土多量。
23 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土中量。
24 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。黒褐色土中量。しまり強。
25 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土多量。しまりあり。
26 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土少量。
27 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。炭化粒極微量。黒褐色土ブロック微量。
28 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土極微量。
29 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土ブロック微量。
30 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土極多量。
31 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土ブロック中量。
32 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土中量。
33 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土極多量。しまりあり。
34 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土微量。
35 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土多量。
36 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土中量。
37 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。黒褐色土ブロック中量。しまりあり。
38 7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土中量。
39　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土少量。
40　7.5YR3/4　暗褐色土
41　7.5YR3/4　暗褐色土
42　7.5YR3/4　暗褐色土
43　7.5YR2/2　黒褐色土
44　7.5YR3/4　暗褐色土
45　7.5YR3/4　暗褐色土
46　7.5YR2/2　黒褐色土
47　7.5YR3/4　暗褐色土
48　7.5YR2/2　黒褐色土
49　7.5YR4/4　褐色土
50　7.5YR3/4　暗褐色土
51　7.5YR3/4　暗褐色土
52　7.5YR3/4　暗褐色土
53　7.5YR3/4　暗褐色土
54　7.5YR3/4　暗褐色土
55　7.5YR2/2　黒褐色土
56　7.5YR2/2　黒褐色土
57　7.5YR3/4　暗褐色土
58　7.5YR3/4　暗褐色土
59　7.5YR3/4　暗褐色土
60　7.5YR3/4　暗褐色土
61　7.5YR3/4　暗褐色土
62　7.5YR3/4　暗褐色土
63　7.5YR3/4　暗褐色土
64　7.5YR4/4　褐色土
65　7.5YR3/4　暗褐色土
66　7.5YR3/4　暗褐色土
67　7.5YR4/4　褐色土
68　7.5YR3/4　暗褐色土
69　7.5YR3/4　暗褐色土
70　7.5YR3/4　暗褐色土
71　7.5YR4/4　褐色土
72　7.5YR3/4　暗褐色土
73　7.5YR4/4　褐色土
74　7.5YR3/4　暗褐色土
75　7.5YR3/4　暗褐色土
76　7.5YR3/4　暗褐色土

第10図　古





5 10m

1/100

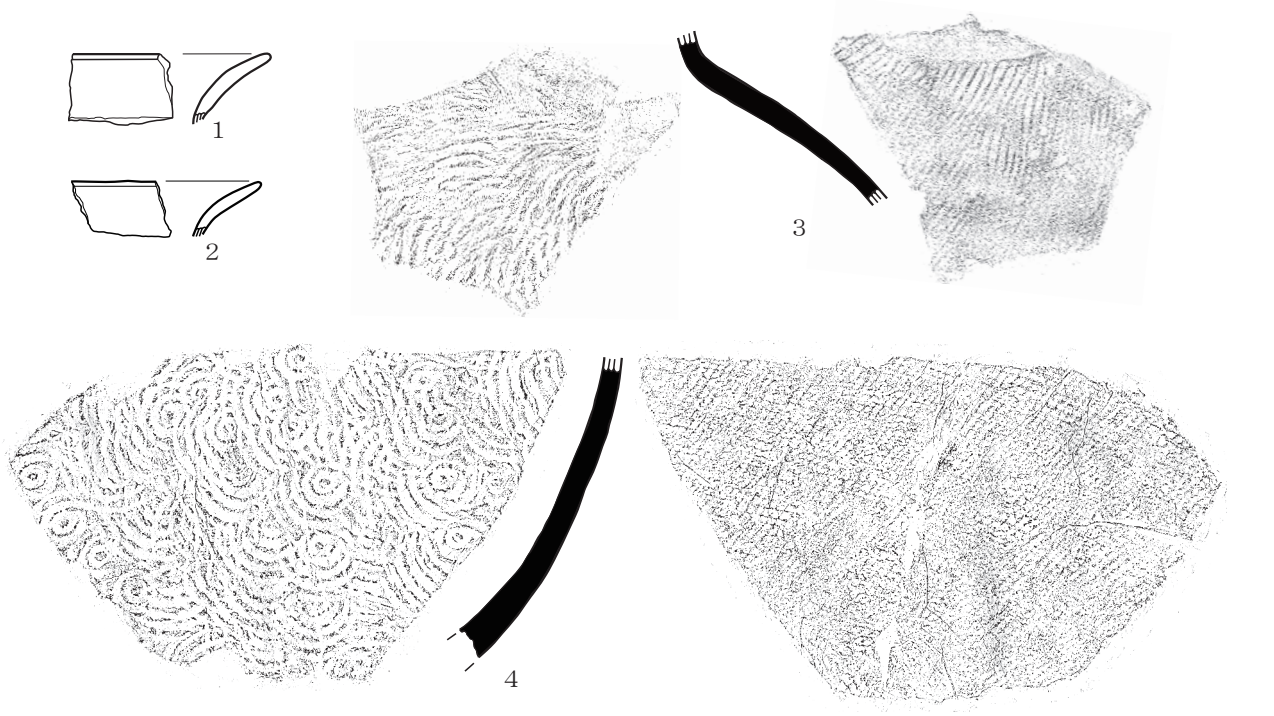
・・・旧表土層

ローム粒多量。黒褐色土中量。
ローム粒極多量。黒褐色土微量。
ローム粒多量。
ローム粒多量。暗褐色土ブロック（～ 20mm）中量。
ローム粒・ブロック中量。黒褐色土ブロック（～ 20mm）極多量。暗褐色土ブロック中量。
ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土多量。
ローム粒極多量。暗褐色土ブロック多量。
ローム粒極多量。黒褐色土微量。
ローム粒・ブロック多量。炭化粒微量。暗褐色土ブロック（～ 20mm）中量。
ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土極微量。
ローム粒・ブロック多量。焼土粒極微量。炭化粒極微量。黒褐色土ブロック極微量。
ローム粒極多量。黒褐色土多量。
ローム粒多量。黒褐色土ブロック（～ 20mm）多量。
ローム粒・ブロック多量。黒褐色土ブロック微量。
ローム粒・ブロック多量。黒褐色土中量。
ローム粒極多量。焼土粒微量。暗褐色土多量。
ローム粒多量。焼土粒極微量。暗褐色土中量。
ローム粒極多量。炭化粒極微量。黒褐色土中量。
ローム粒・ブロック多量。炭化粒極微量。
ローム粒極多量。焼土粒極微量。黒褐色土極微量。
ローム粒多量。黒褐色土中量。上部表面硬化。
ローム粒極多量。黒褐色土微量。上部表面硬化。
ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土極微量。
ローム粒中量。黒褐色土ブロック微量。暗褐色土極多量。
ローム粒極多量。焼土粒微量。
ローム粒極多量。黒褐色土極微量。
ローム粒・ブロック多量。黒褐色土微量。しまりあり。
ローム粒・ブロック（～ 20mm）多量。黒褐色土極微量。
ローム粒極多量。黒褐色土極微量。しまりあり。
ローム粒多量。黒褐色土多量。しまりあり。
ローム粒多量。黒褐色土極微量。
ローム粒極多量。黒褐色土ブロック中量。
ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土ブロック（～ 20mm）多量。
ローム粒多量。黒褐色土ブロック（～ 50mm）中量。暗褐色土ブロック（～ 40mm）中量。
ローム粒極多量。焼土粒極微量。
ローム粒極多量。しまりあり。
ローム粒極多量。焼土極微量。しまりあり。

古墳断面図

第３項　墳丘盛土内出土遺物（第 11 図、図版 8）

１・2 は土師器甕の口縁部破片である。口唇部に面取りが見られ短く「く」の字に外反する。古式の土師器であろう。3・4 は須恵器の甕である。複数の破片が出土しているものの、胎土焼成から、同一個体と判断される。頸部から口縁部の資料はない。焼成はあまく、やや軟質である。外面に擬格子状の並行叩き、内面には青海波の当て具痕が全面に残る。古墳時代後半の資料と判断される。墳頂部及び C2 グリッドに於いて集中して出土している。産地は不明。



第 11 図　墳丘盛土内出土遺物　0　10　20cm　(1/3)

第４項　周溝（第 9・10 図、図版 2）

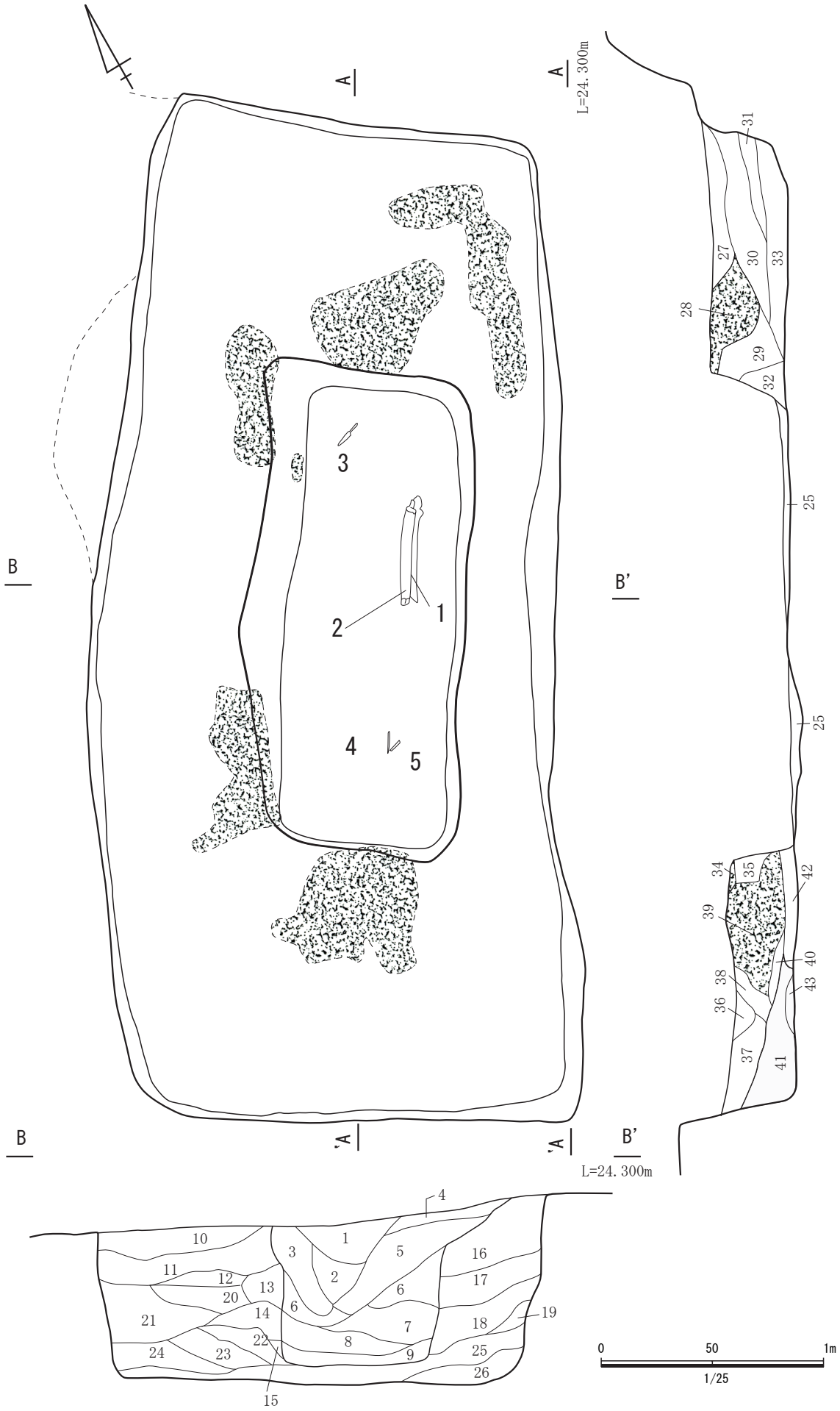
北側部分の周溝は西側端部が撹乱により削平を受けるが最長で長さ 11.6m、幅 4.8 m、確認面下最大で 48ｃｍの掘り込みを有す幅広の弧状に検出されている。北西側部分で途切れ（陸橋ヵ）、さらに北東部分でも大きく途切れている。西側の周溝は長さ 10.3m、幅 5.4m、深さ最大で確認面下 32㎝を測る。やはり古墳の墳丘に対して不整形ながらも弧状に広がる。

東側の周溝は長さ 7.8m、幅 3.2m、深さ最大で確認面下 45㎝を測る。やはり古墳の墳丘に対して不整形ながらも弧状に広がる。

墳丘の南側については崖のため、安全面を考慮して平面調査を行えず、墳丘 A セクションの延長線上にトレンチを設定したところ黒色土の落ち込みを確認した。南側を撹乱により削平されており規模は明確ではないが覆土の状態から周溝の可能性がある。

確認できる最大幅は 1.0 ｍである。周溝の覆土は 6 層に分層され、いずれも自然堆積を示しており、覆土最上層に焼土の広がりが確認されている。近接した B2 グリッドに 4 号土坑 (中･近世の火葬土坑の可能性がある) が存在しているものの直接の関連性は確認できなかった。

周溝内からの遺物はほとんど検出されていない。縄文土器 2 点が検出されたのみであった。



第 12 図　主体部実測図

主体部土層説明

1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒中量。焼土極多量。黒褐色土ブロック多量。しまりあり。
2　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量。黒褐色土ブロック（～20mm）中量。
3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土多量。しまりあり。
4　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。しまりあり。
5　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。暗褐色土ブロック多量。しまりあり。
6　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土中量。
7　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。暗褐色土ブロック（～20mm）微量。
8　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。
9　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。
10　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土極微量。しまりあり。
11　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土ブロック微量。しまりあり。
12　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまりあり。
13　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。しまり強。
14　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。しまり強。
15　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまり強。
16　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土少量。しまりあり。
17　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土少量。しまりあり。
18　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。暗褐色土中量。しまりあり。
19　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。しまり強。
20　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。暗褐色土少量。しまり強。
21　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土極微量。暗褐色土極微量。
22　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。暗褐色土多量。
23　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。暗褐色土中量。
24　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。しまり強。
25　10YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック（～50mm）多量。しまり強。
26　10YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック極多量。しまり強。
27　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。炭化粒極微量。黒褐色土微量。
28　10YR6/2　灰褐色土　橙色土ブロック（2～20mm）多量。しまり・粘性強。
29　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極微量。
30　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。黒褐色土少量。
31　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。灰褐色粘土ブロック多量。
32　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。黒褐色土極微量。しまりあり。
33　10YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）極多量。暗褐色土微量。しまりあり。
34　10YR5/3　にぶい橙色土　ローム粒少量。橙色粘土粒中量。しまり・粘性強。
35　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。灰褐色粘土粒中量。
36　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。橙色粘土ブロック（～30mm）極微量。しまりあり。
37　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。橙色粘土粒少量。しまりあり。
38　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまりあり。
39　10YR6/2　灰褐色土　ローム粒多量。黒褐色土少量。橙色粘土ブロック（～20mm）多量。しまり・粘性強。
40　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。灰褐色粘土粒多量。
41　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。しまり・粘性あり。
42　10YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。暗褐色土ブロック多量。しまり強。粘性あり。
4310YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック（～20mm）多量。しまりあり

第５項　主体部（第 12 図、図版 4・5）

墳丘頂上部分で主体部は検出されなかった。変則的な古墳を想定して、十字のトレンチの間に 4 本のトレンチを追加して主体部の検出に努めた。この結果、北西部分の古墳裾付近で土坑状の落ち込みを検出した。

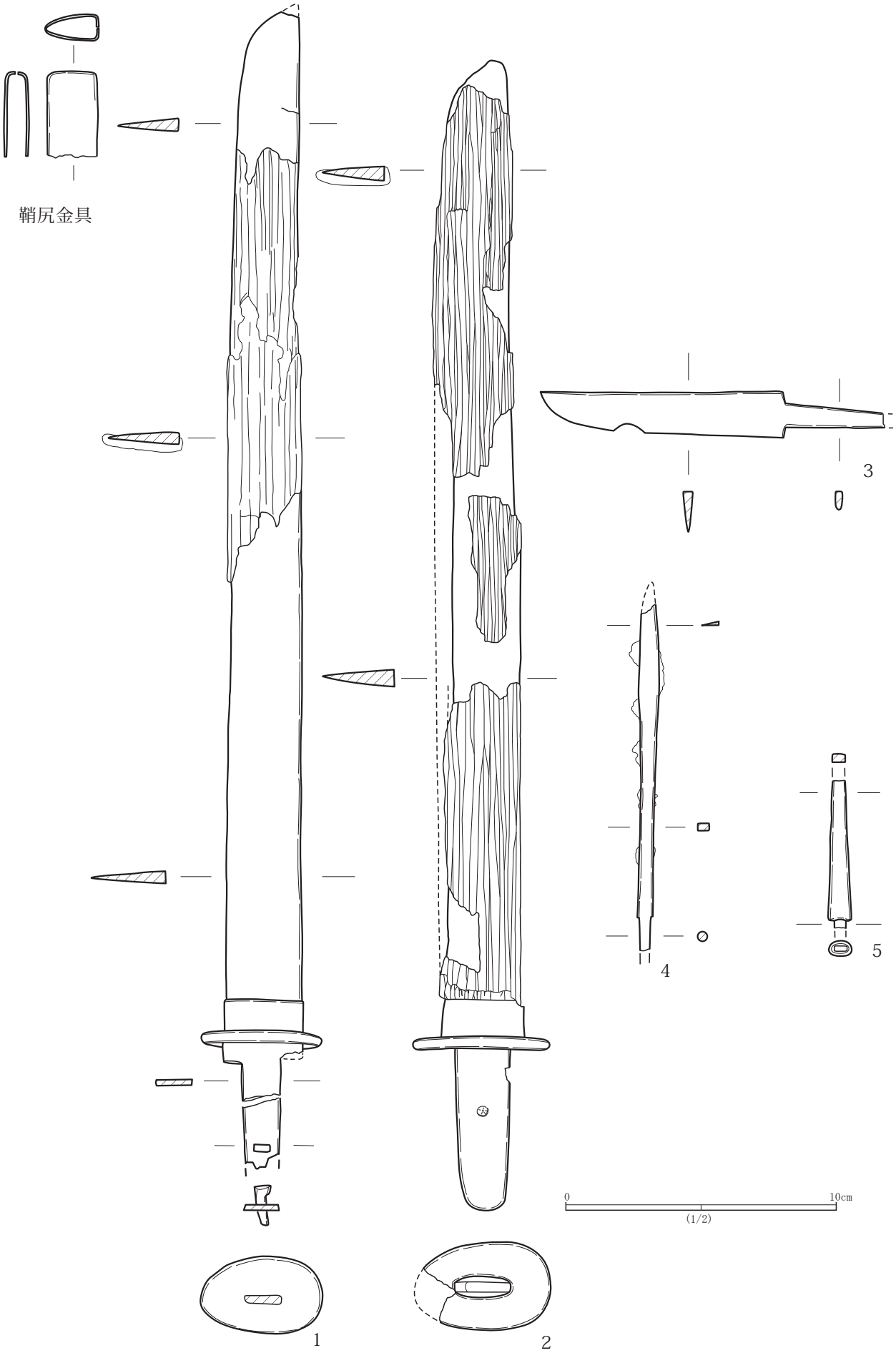
掘り込みは主軸を 28 度東に振るもののおおむね南北方向に占地している。掘方は長軸 4.7m、短軸 2.1m の長方形を呈し、主体部の最深部は確認面から 70㎝掘り下げられている。確認の結果、主体部は掘方の中心部に木棺を埋葬したものと考えられ、掘方とほぼ相似形に中央部分に周辺と比べ明らかに軟弱な土が入り込む部分が確認されている。この木棺と想定される部分の規模は長軸 2.1m、短軸 1.0m を測り、確認面からの深さは 63㎝で、掘方を 7㎝程埋め戻したあとに設置している状況がうかがえる。覆土は 26 層に分層され、人為堆積を示している。木棺の裏込はロームと黒色土の混合土を基本とするが、小口側の南北両端部に粘土が充填され、棺を固定している。いわゆる粘土郭とは異なり粘土は部分的な充填にとどまっている。組み合わせ式の板による棺の可能性が想定される。

第６項　主体部出土遺物（第 13 図、図版 10）

木棺内には 2 振りの直刀が重なるように出土している。2 本は切っ先を南方向に揃えて棺の底より出土している。その他南側端部寄りでは、2 本の鉄鏃、北側では刀子が 1 点出土している。玉類の出土は棺内の土すべてについて洗浄を行ったが、検出には至らなかった。

1 の直刀は長さ 45.5㎝、刀身の幅は最大で 3.2㎝を測る。やや短い直刀で、柄部には倒卵形の鍔が付されている。鍔は長径 5.4㎝、短径 3.5㎝、厚さ 5㎜を測る。透かしは確認できない。両関造りで、錆により不明瞭だが、目釘 1 ヶ所が確認できる。茎部の長さ 6.4㎝、刀身 39.1㎝を測る。刀身の厚さは最大 0.7㎝で峰はほぼ直線である。全体に木質が付着している。鏥は長さ 1.5㎝、幅は 3.3㎝を測る。

2 の直刀は両関造りの平峰である。長さ 43.2㎝、刀身の幅は最大で 3.1㎝を測る。先端部分は僅かに欠損するものである。1 同様短い直刀で、柄部には倒卵形の鍔が付される。鍔の長径は 4.8㎝、短径 3.1㎝、厚さ 5㎜を測る。透かしは確認できない。茎は基部側が破損しているが残存長は 1.5㎝。錆により目釘は確認できない。



第 13 図　主体部出土遺物

刀身 41.7㎝を測る。刀身の厚さは最大 5㎜で峰はほぼ直線である。鏃が残る。　鏃は長さ 1.2㎝、幅 3.1㎝で板状を呈する。先端部分に鞘尻金具が残っていた。薄い鉄板を湾曲させて巻きつけたものであろう。長さ 3.5㎝、幅 2.0㎝、厚さ 1 ㎜、内部の空洞は 1 ㎝程度であろう。

3 は刀子である。両関造で刀身 9.7㎝、茎部 4.0㎝、刃部の断面形は三角形で厚さ 4㎜、茎部の断面形はやや丸みを帯びる長方形で厚さ 3㎜、最大幅は 9㎜を測る。茎部の基部側は欠損している。

4 は鉄鏃である剣身篦被長茎鏃である。鏃身部は先端部を僅かに欠損する片側のみに僅かながら膨らみを持ち腸抉が付されるものと判断される。鏃身部の最大幅は、1.5㎜で三角形になっている。鏃身から篦被までの残存長は 12.4㎝、幅 5㎜、厚さ 3㎜を測る。関は僅かな段となっている。棘状であろうか両関である。茎は下端が欠損するもので断面形状は円形で直径 4㎜を測る。

5 は鉄鏃の篦被部の断片である。全長 5.3㎝、鏃身部は欠損しており形状は不明である。篦部の残存長は 4.9㎝を測る。断面形は長方形を呈し、最大幅で 9㎜、厚さ 4㎜を測る。関は両関で茎部は欠損してしているが、断面形は長方形を呈するものと判断される。茎部の残存長は 4㎜。

第 7 項　墳丘直下の祭祀遺構（第 14・15 図、図版 6-1・2）

調査段階で旧表土面の直上または旧表土面に於いて、土師器壺が破砕された状態で出土し、直下の表土面は被熱した痕跡がある。検出された遺物の分布状況は南北方向に設定した A トレンチの墳頂部よりやや北側部分から西側にかけてで、主体部の位置よりも東側寄りになる。遺物は細かく破砕されているものの 1 個体分の資料で、復元実測により特殊な形状の壷であることが判明した。破片の総重量は 2649.9g であった。

胴部は球形で底部はやや突出している。肩部で大きく張り、口縁は内傾気味に立つ。大形の坩に似ているが、口縁部は開かずに袋状に窄まっている。胎土中には砂を多く含み、焼成はやや軟質である。内面は焼成不良のためか底部付近ほど剥落が見られる。器面の調整は細かなミガキで内面は粗いヨコナデが行われる。技法的には古墳中期、5 世紀中葉の遺物と判断している。本遺物の類例は管見に触れたものでは、千葉県芝山町東台遺跡 3 号住居跡の例がある。本遺物よりやや小型になるものの、共伴遺物には古式須恵器が含まれるもので、古墳時代中期末の遺物と判断されている。

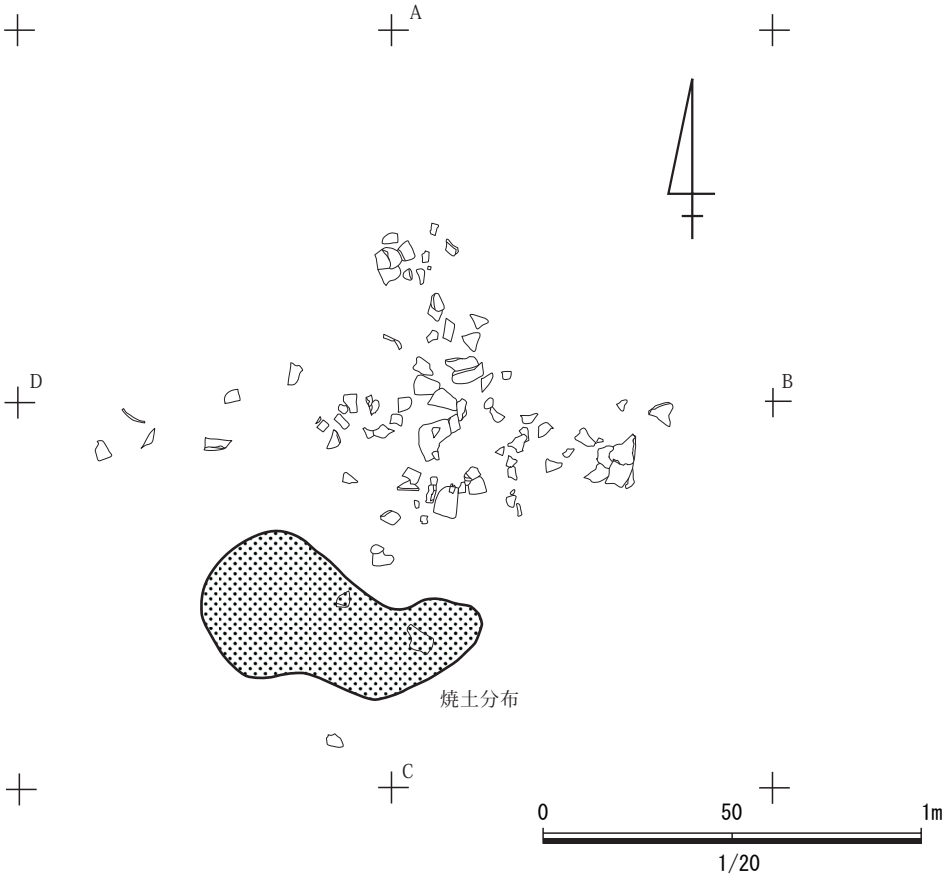
本遺物の出土状況は明らかに旧表土上面に於いて人為的な行為が行われたものであり、古墳築造前に執り行われた祭祀的行為と判断される。

第 8 項　旧表土下の調査

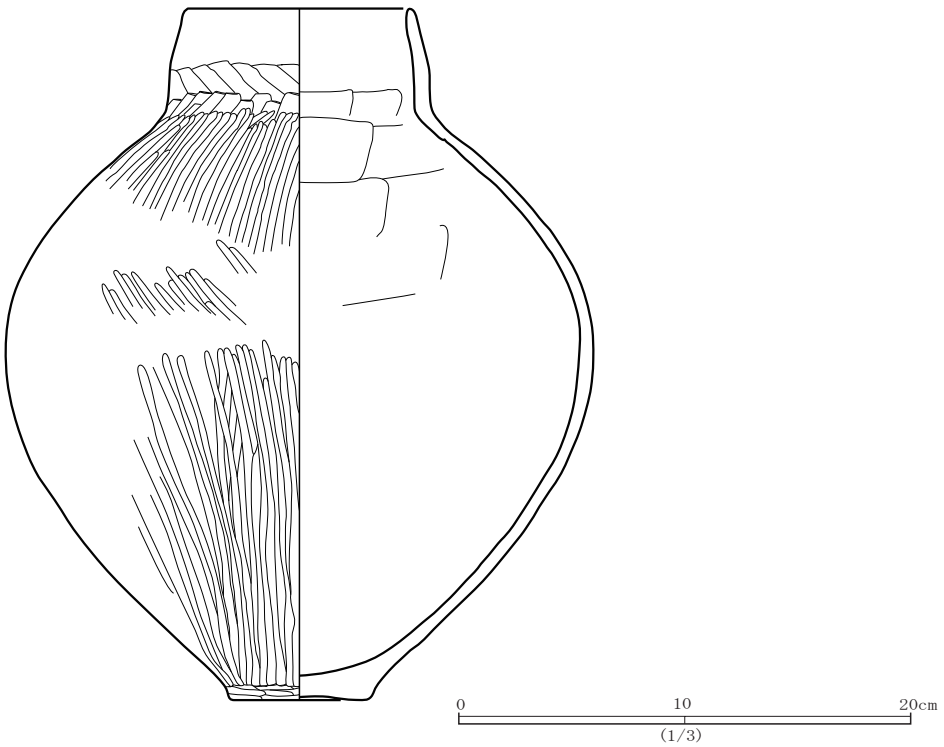
墳丘盛り土を除去後に旧表土面で主体部の確認作業を行った。この結果、黒色の旧表土面は墳丘部分の大半に広がっていたものの、E2 グリッド付近に於いて旧表土面が攪拌された部分が認められ、主体部の検出に至った。主体部は前述のとおり、墳丘の西側裾部分に位置しており、旧表土、新規テフラ層を切ってハードロームまで掘りこまれていた。

墳丘盛土下からは、その他の遺構は検出されなかった。なお、当初 2 号及び 5 号溝は墳丘の下に伸びるものと判断していたが、墳丘の裾部分で屈曲する状況が確認されたために、墳丘を意識した構築がなされているものと判断し、古墳築造以降の遺構と判断することができた。特に南側に於いて検出された 5 号溝はその形状から高品城の土塁に伴う溝の可能性が想定された。1 次調査で北側崖寄りに検出されていた土塁の延長と見ることができる。

縄文時代の遺構として 1・2 号土坑が検出されているもののその他の遺構は墳丘下からは検出されなかった。



第 14 図　墳丘下祭祀遺構遺物分布図



第 15 図　墳丘下祭祀遺構遺物

第４節　中・近世

第１項　溝

本調査において溝は８条検出されている。内２・４号溝、１・２号道跡については形態、覆土共に類似するが、底部に硬化面を持つものと持たないものに分けられる。硬化面を持つものを道とし、硬化面を持たないものを溝としたが、性格が同一である可能性も残る。１号溝と３号溝は覆土が異なるものの、形態が類似する。なお調査には至らなかったが、北側周溝の覆土中から１・３号溝の延長線上に同遺構と形態が類似する落ち込みを確認しており、墳丘との関連性も考えられる。

１号溝（第９・16 図、図版 7-8）

調査区 B3 及び C3 グリットに位置する。南側で東側周溝を切って構築され、東側部を１号道跡に削平される。規模は長さ 13.6 m、幅 1.6 m、深さ 15cm を測る。断面形は皿状断面を呈す。走方向は N-30°-W となるが、墳丘を中心に弧を描く形で検出している。遺物は出土していない。

２号溝（第 9.16 図、図版 8-1）

調査区 A2、B2 グリットに位置する。調査区北側から墳丘北側裾部に南走し、西側部で１号土坑を、中央部分よりやや南側部で北側周溝をきって構築されている。規模は長さ 18.9 m、幅 0.8 m、深さ 25cm を測る。断面形は皿状断面を呈す。走方向は S-15°-E となる。 北部東側、４号溝の延長線上に膨らみが確認され、同遺構との関連性が伺える。

遺物は縄文土器１片が出土しているが、本遺構に伴うものではない。

３号溝（第９・16 図、図版 8-2）

調査区 B1、C1 グリットに位置する。規模は長さ 7.9 m、幅 1.2 m、深さ 17cm を測る。断面形は皿状断面を呈す。走方向は N-26°-E となり、西側周溝の北西側端部より墳丘を中心に弧を描く形で北東側方向に延びる。覆土が周溝と類似する。１号溝と本遺構は同一弧状に連続する溝の可能性が高く、古墳の周溝の可能性が考えられる。

遺物は縄文前期及び後期の土器が少量出土している。本遺構に伴う遺物とは判断されない。

４号溝（第９・16 図、図版 8-3）

調査区 A2 グリットに位置する。西側部分を試掘トレンチにより削平されるが、規模は確認最大長 3.0 m、幅 0.75 m、深さ 15cm を測る。断面形は皿状を呈す。走方向は N-41°-E となり、北東から南西にほぼ直線的になる。

遺物は検出されていない。

５号溝（第９・16 図、図版 8-4）

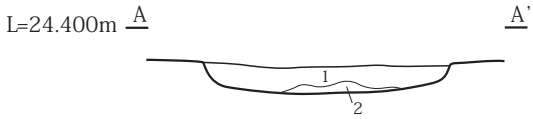
調査区 D1・2・3 グリットに位置する。墳丘南側で調査区南端部に東西に走る。走方向は N-88°-W をさす。当初、墳丘下に構築されている遺構と判断していたが、覆土の状況より、墳丘に沿って構築されたために墳丘の盛土が流出し、溝の上層にかぶってしまったものと判断される。したがって本遺構は古墳時代よりも新しい遺構と判断した。確認された全長は 26.10 m、最大幅２m、深さ 58cm を測る。断面形は U 字状を呈す。溝の底部には土坑状の掘り込みが連続して確認されており、植栽に伴う溝、もしくは１次調査で確認されている土塁に伴う遺構の可能性が想定される。

遺物は縄文土器の細片が出土しているのみで . 時期を特定できる資料はない。覆土からは近世が想定される。

６号溝（第９図、図版 8- ５）

調査区 D2 グリッドに位置する。古墳の周溝を確認するために、南側斜面部に向かって、A セクションの延

1 号溝

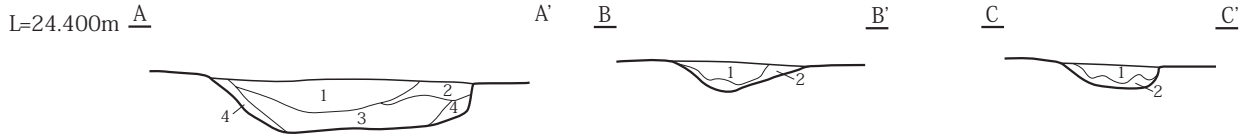


1 号溝 A セクション

1　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒多量。

2　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。

2 号溝



2 号溝 ABC セクション

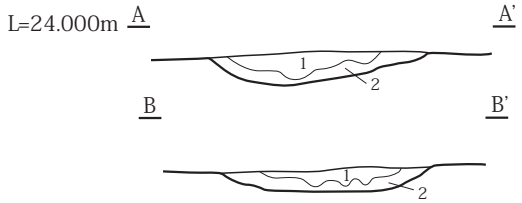
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまり強。

2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。しまりあり。

3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまりあり。

4　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。

3 号溝



3 溝

AB セクション

1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土多量。

2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土中量。

4 号溝

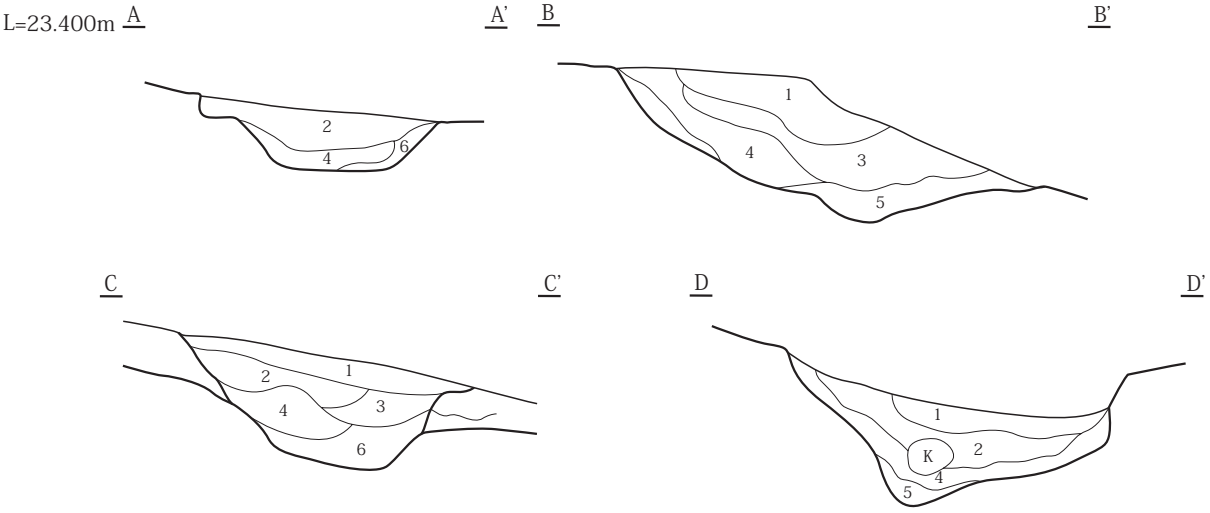
4 溝

AB セクション

1　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック多量。しまりあり。

2　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒極多量。しまりあり。

5 号溝



5 号溝 A-D セクション

1　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。

2　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。

3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。暗褐色土中量。しまりあり。

4　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。焼土粒極微量。しまりあり。

5　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。炭化粒極微量。暗褐色土粒極微量。

6　10YR4/4　褐色土　ローム粒極多量

第 16 図　溝セクション

0　1　2m

1/40

長上に試掘坑を設定し、掘り下げを行ったところ、本トレンチを東西方向に横断する溝を確認したものである。溝の南側立ち上がりは、撹乱により削平されており、明瞭ではない。規模は最大1m、深さ0.45mは確認できるもののほかは不明。遺物は検出されていない。

第2項　道状遺構

1号道跡（7号溝）（第9・17図、図版7-5・6）

調査区B3、C3グリットに位置する。調査区東側部分を北から南に走行する。確認された規模は長さ19m、最大幅1.4m、断面形状は浅い皿状で深さ28cmを測る。硬化面はこの覆土の下部15㎝程度である。当初溝として判断していたが、硬化面の確認により道と判断した。現在の赤道の延長部分にあたり、近世の道と判断される。

本遺構に伴う遺物は検出されていない。

2号道跡（8号溝）（第9・17図、図版7-7）

調査区A2グリットに位置する。規模は長さ4.4m、最大幅0.7m、深さ10cmを測る。断面形は皿状断面を呈す。主軸方向はN-83°-Eとなり、東西方向の走行で、ほぼ直線的に伸びる。両端部で途切れる。中央部と東側部分の底部に硬化面が確認できる。硬化部分の厚さは5㎝を測る。

遺物は検出されていない。

第3項　土坑

3号土坑（第9・18図、図版7-1）

本土坑は、C1グリッドに於いて検出された。ほぼ円形の掘り込みであり、軸長最大で0.9m、確認面下の掘り込みは20㎝を測る。断面の形状は皿状で、覆土は3層に分層される。

覆土中より遺物は検出されておらず時期は不明であるが、覆土の状況から中・近世の遺構と判断した。

4号土坑（第9・18図、図版7-2・3）

B2グリッドに位置する。軸長1.3mのほぼ正方形の掘り込みであり、確認面下の深さは40cmを測る。断面の形状は鍋底状を呈し、底部のほぼ中央部に東西方向に最大幅25cm、深さ約14ｃｍの溝が検出されている。覆土は9層に分層される。8・9層には多量の炭化物と灰が混入する。炭化物層の範囲は、土坑底部の全域に及んで検出されている。底部に部分的に熱変した部分が確認されているものの、被熱により赤色に焼けた部分は確認されなかった。

覆土中より遺物は検出されておらず時期は不明であるが、覆土及び形状から火葬土坑に酷似するものの骨片などの検出はない。中・近世の遺構と判断した。

5号土坑（第9・18図、図版7-4）

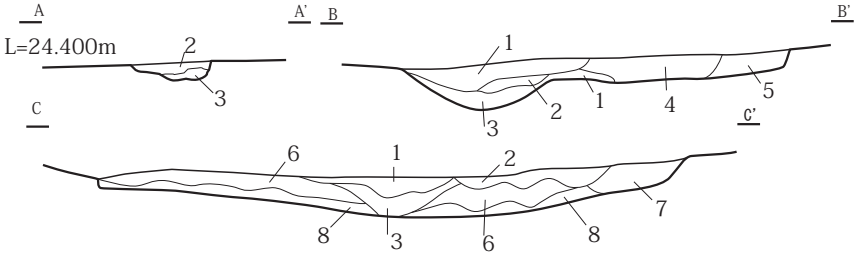
本土坑は、B2グリッドに於いて検出された。円形の掘り込みで、長軸0.73m、短軸0.65m、確認面下の掘り込みは25㎝を測る。本遺構は北側周溝と重複関係にあるが本遺構のほうが新しい。断面の形状はU字状で、覆土は2層に分層される。遺物は検出されておらず時期は不明であるが、覆土の状況から中・近世の遺構と判断した。

6号土坑（第9・18図）

調査区D2グリットに位置する。古墳の周溝を確認するために、南側斜面部に向かって、Aセクションの延

本土坑は、A1、A2グリッドに於いて検出された。北側部分で1号土坑と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.45m、確認面下の掘り込みは15㎝を測る。断面の形状は浅いU

1 号道



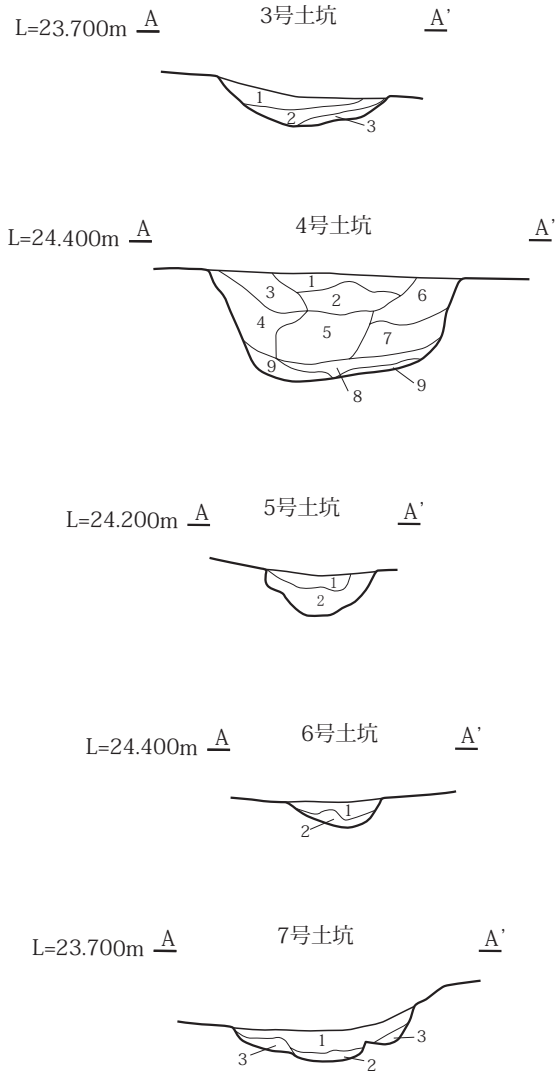
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒微量。炭化粒極微量。しまり強。硬化する。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒中量。焼土粒極微量。しまり強。硬化する。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。しまり強。硬化する。
4　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。黒褐色土ブロック（30 ～ 50mm）少量。しまり強。硬化する。
5　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。焼土粒含む。しまりあり。
6　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土ブロック多量。周溝覆土。
7　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。周溝覆土。
9　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土ブロック中量。周溝覆土。

2 号道

1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。しまり強。
2　7.5YR4/4　褐色土　ローム粒多量。しまり強。上部硬化。

0　1　2m
1/40

第 17 図　道セクション



3 号土坑 A-A´ セクション
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量。焼土粒微量。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。

4 号土坑 A-A´ セクション
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。黒褐色土中量。しまりあり。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。しまりあり。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。焼土粒極微量。
4　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。焼土粒微量。
5　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。しまりあり。
6　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。焼土粒・炭化粒極微量。
7　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒・炭化粒極微量。
8　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。炭化粒・ブロック極多量。しまり粘性なし。
9　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒極多量。焼土粒極微量。炭化粒多量。

5 号土坑 A-A´ セクション
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。黒褐色土ブロック多量。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。

6 号土坑 A-A´ セクション
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。

7 号土坑 A-A´ セクション
1　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量。焼土粒極微量。
2　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック多量。
3　7.5YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック極多量。焼土粒極微量。

0　1　2m
1/40

第 18 図　土坑セクション

字形で、覆土は２層に分層される。調査時に１号土坑との新旧を誤認し、１号土坑と同時に調査を行っている。

覆土中より遺物は検出されておらず時期は不明であるが、覆土の状況から中・近世の遺構と判断した。長上に試掘坑を設定し、掘り下げを行ったところ、本トレンチを東西方向に横断する溝を確認したものである。溝の南側立ち上がりは、撹乱により削平されており明瞭ではない。規模は最大幅 1m、深さ 0.45m は確認できるものの他は不明。

遺物は検出されていない。

７号土坑（第 18 図）

本土坑は、C3 グリッドに於いて検出された。ほぼ円形の掘り込みで、長軸 1.1 m、短軸 0.9 m、確認面下の掘り込みは 15㎝を測る。断面の形状は皿形で、中段にテラス状の段を持つ。覆土は３層に分層される。本土坑は東側周溝部と重複関係にあり本遺構のほうが新しい。

覆土中より遺物は検出されておらず時期は不明であるが、覆土の状況から中・近世の遺構と判断した。

第４項　遺構外出土遺物（第 19 図、図版 11）

遺構外出土遺物としては、６点を掲載した。いずれも近世の所産である。

１は陶器の小皿である。鉄泥がかかるもので、志戸呂（瀬戸）の製品であろうヵ。燈明皿の可能性もある。

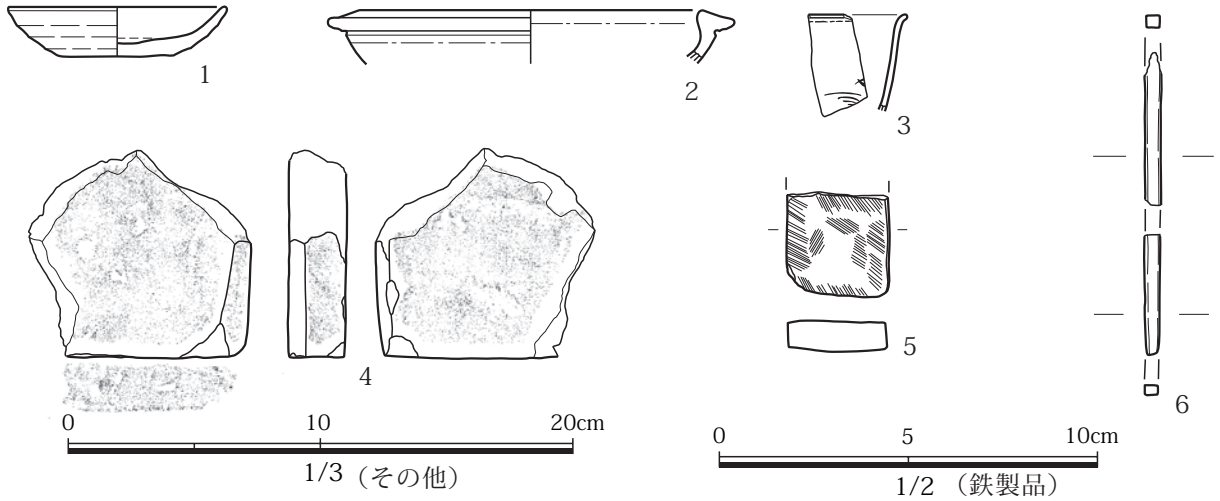
２は雪平鍋である。口縁部は水平に開き露胎、内面藁灰釉、外面は灰釉。

３は染付の端反の小杯である。呉須による染付が施される。肥前ヵ。

４は燻瓦で熨斗瓦であろう。墳丘の表土から出土している。近世の所産であろう。

５は砥石である。砥沢または天草砥の可能性がある。凝灰岩質で近世の所産であろう。４面に使用痕が見られ、砥面は平坦である。

６は鉄製品である。棒状を呈するもので、断面形は方形。性格は不明。残存長は 4.3㎝、3.4㎝で、二つに折れているが、接合しない。断面の最大幅は 4㎜、厚さ 4㎜を測る。古墳時代の遺物の可能性もある。



第 19 図　遺構外出土遺物

第５章　まとめ

本遺跡に於いて検出された古墳について、若干の考察を述べてまとめとする。

本古墳は円形を呈するいわゆる円墳である。周溝は全体に巡るものではなく、部分的に陸橋を有する形状であった。舌田遺跡第１次調査に於いてローム面まで削平を受けた部分に絹雲母片岩を用いた石棺を有する古墳を検出していたことから、当初は、本古墳も終末期の群集墳と想定していた。

しかしながら、古墳墳丘下から検出された祭祀遺構の遺物は、５世紀中葉から後半が想定される。一方で、主体部から出土した鉄製の直刀及び鉄鏃の形状は６世紀以降の遺物の可能性が高い。以上のことから考えると、本古墳の第１次主体部は墳丘頂上部分に設置されていたもので、裾部で発見された主体部は２次的な追葬による主体部と判断される。したがって、古墳は５世紀中葉から後半に作られたもので、その後６世紀に追葬が行われたものと判断され、さらに、中・近世に削平を受けている。なお、C2 グリッド墳頂部に於いて検出された須恵器の甕の破片資料は同一個体であることから、追葬時に副葬された須恵器の可能性がある。６世紀代の須恵器であり東海系の須恵器と判断している。したがって、５世紀代に築かれた古墳の裾部分に、６世紀代に追葬が行われたものと判断される。

１次調査に於いて検出された古墳は石棺の形状から同古墳は終末期の古墳と想定され、本古墳は１次調査に於いて検出された古墳に先行する古墳であり、追葬も１次調査の古墳が築造される以前に実施されたものと判断される。

古墳の築造前に祭祀的行為を行った事例としては、2009 年早稲田大学で行われた日本考古学協会大会に於いて、群馬県太田市の前期古墳である成塚向山１号墳の事例が報告されている。同古墳の築造は 10 段階の工程が想定され、第３工程で旧表土面上で【壺の設置＋甕などの破砕】が確認されている。この古墳の築造時期と、盛土内より出土した遺物、墳頂部から出土した遺物の時期関係が本遺跡の古墳にも共通する部分がある。前期と中期～後期の古墳と時期差があるものの、古墳築造時に祭祀的行為が確認された例としては、興味ある資料と言える。

今後このような類例が増加することにより、古墳築造における祭祀的行為の内容がより明確になるものと考える。

東寺山戸張作遺跡の発掘調査からおよそ 35 年近い時の流れが過ぎ、政令指定都市として発展する千葉市の中央部分にぽっかりと残された山林の中に、良好な状況で 1500 年もの眠りについていた古墳が残されていたことに改めて驚く。遺跡の北側を走りぬける京葉高速道路の建設時に調査が行われた東寺山戸張作遺跡から、直線で 500 mほどの近接した位置にあるこの古墳。時期的にもまた古墳の形状からも類似点が多く、密接な関係が想定される。

【参考引用文献】

野平伸一『舌田遺跡』千葉市教育委員会 2005
簗瀬裕一『高品城Ⅰ』千葉市教育委員会 1997
中村恵二　他『東寺山・戸張作遺跡』千葉県文化財センター 1977
大賀　健『下吹入遺跡群』「Ⅰ東台遺跡」下吹入遺跡調査会　芝山町教育委員会 1987
深澤敦仁「太田市成塚向山１号墳の研究」日本考古学協会大会レジュメ早稲田 2009
菊池健一『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』千葉市東寺山第三土地区画整理組合　財団法人千葉市文化財調査会 1999

写　真　図　版

1　遺跡遠景（南から）

2　遺跡全景

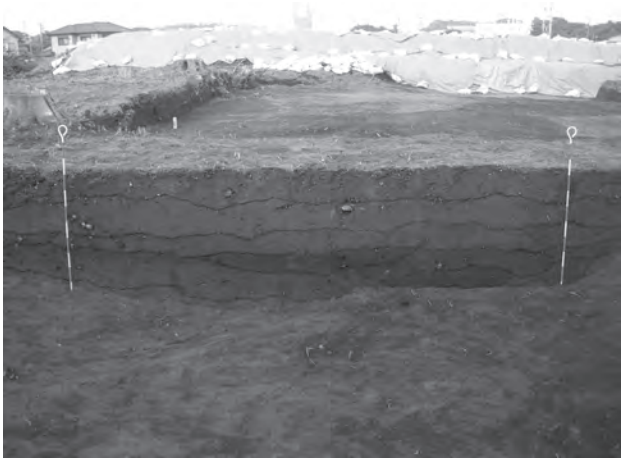
図版2

1　墳丘表土除去状況（北から）

2　周溝西側確認状況

3　周溝北側検出状況

4　周溝東側検出状況



5　北側周溝セクション

1　墳丘立ち割り状況（西から）

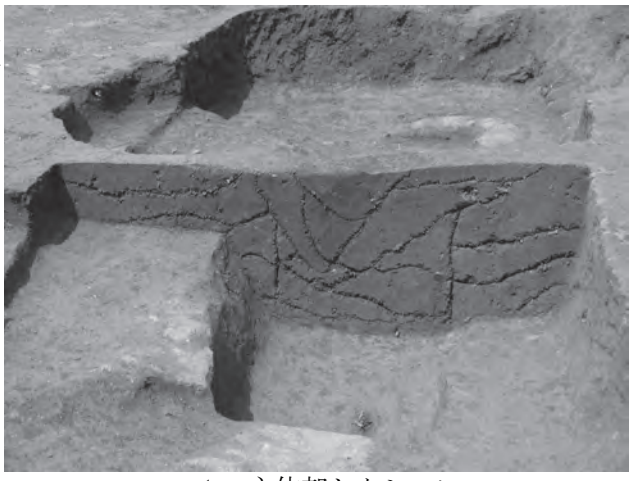
2　墳丘立ち割り状況東側セクション

3　墳丘立ち割り状況南北方向

4　墳丘立ち割り（東西方向）

5　盛土除去状況

図版4



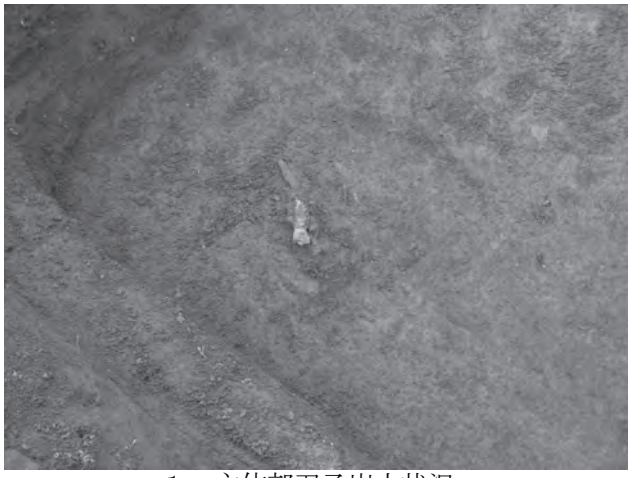
1　主体部セクション

2　主体部埋葬部分全景

3　主体部全景

4　直刀出土状況

5　鉄鏃出土状況



1　主体部刀子出土状況

2　主体部北側粘土充填状況

3　主体部南側粘土充填状況

4　粘土裏込立ち割り状況

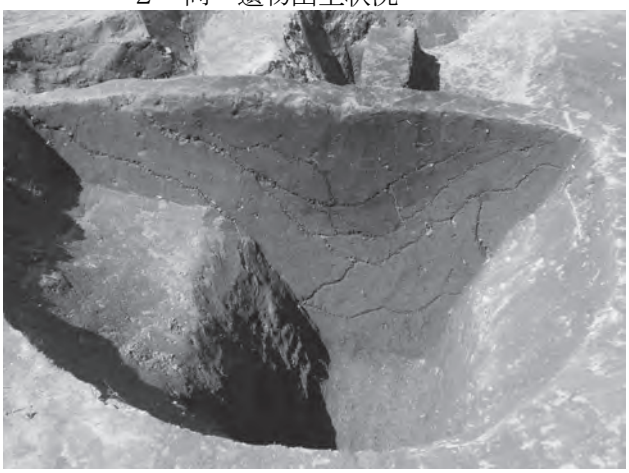
5　主体部完掘状況

図版6

1　墳丘下祭祀遺物出土状況

2　同　遺物出土状況

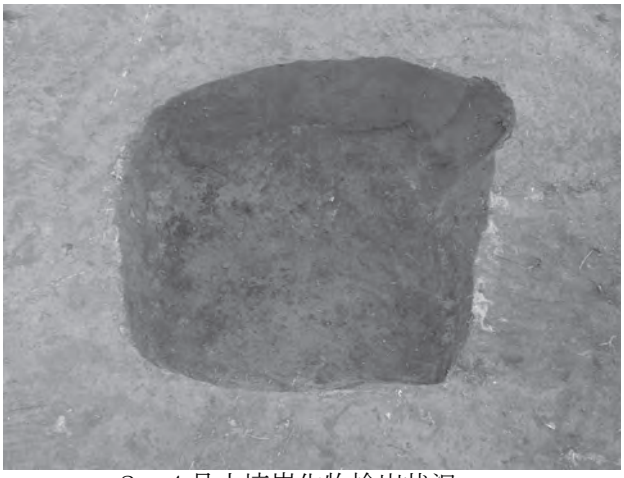
3　1号土坑完掘



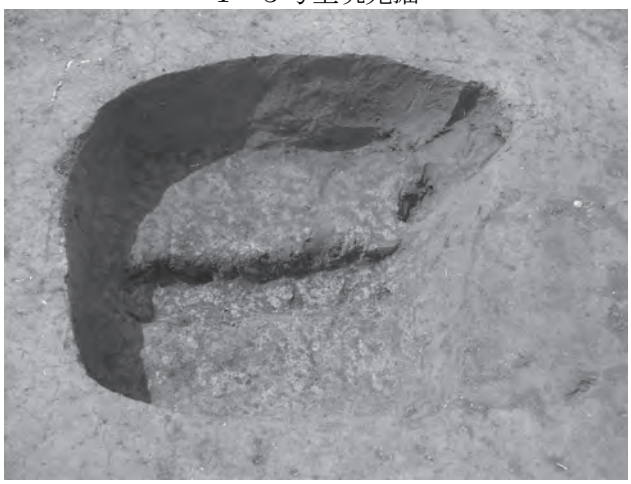
4　2号土坑セクション

5　2号土坑完掘

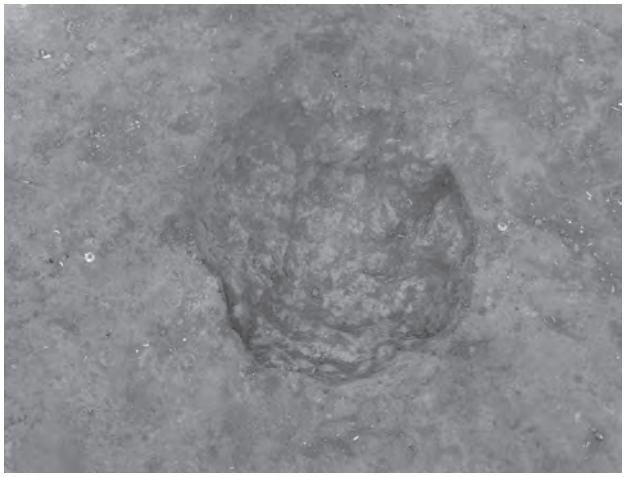
1　3号土坑完掘



2　4号土坑炭化物検出状況



3　4号土坑完掘



4　5号土坑完掘

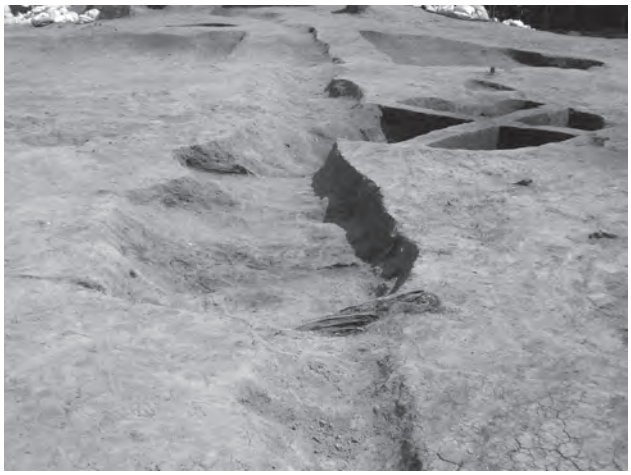
5　1号道確認状況

6　1号道完掘

7　2号道完掘

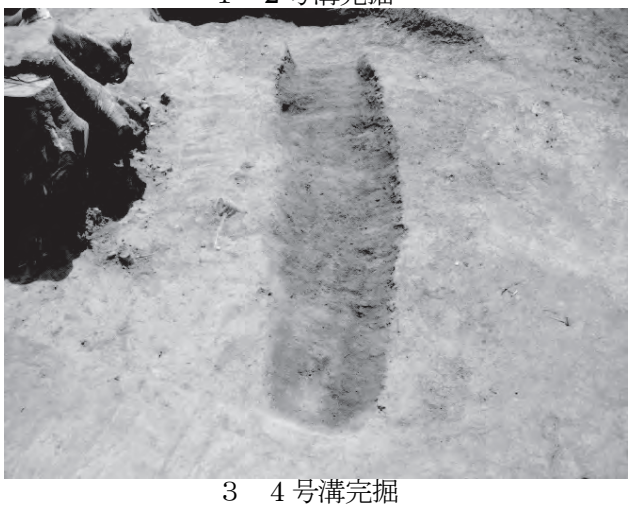
8　1号溝完掘

図版8



1　2号溝完掘

2　3号溝完掘



3　4号溝完掘

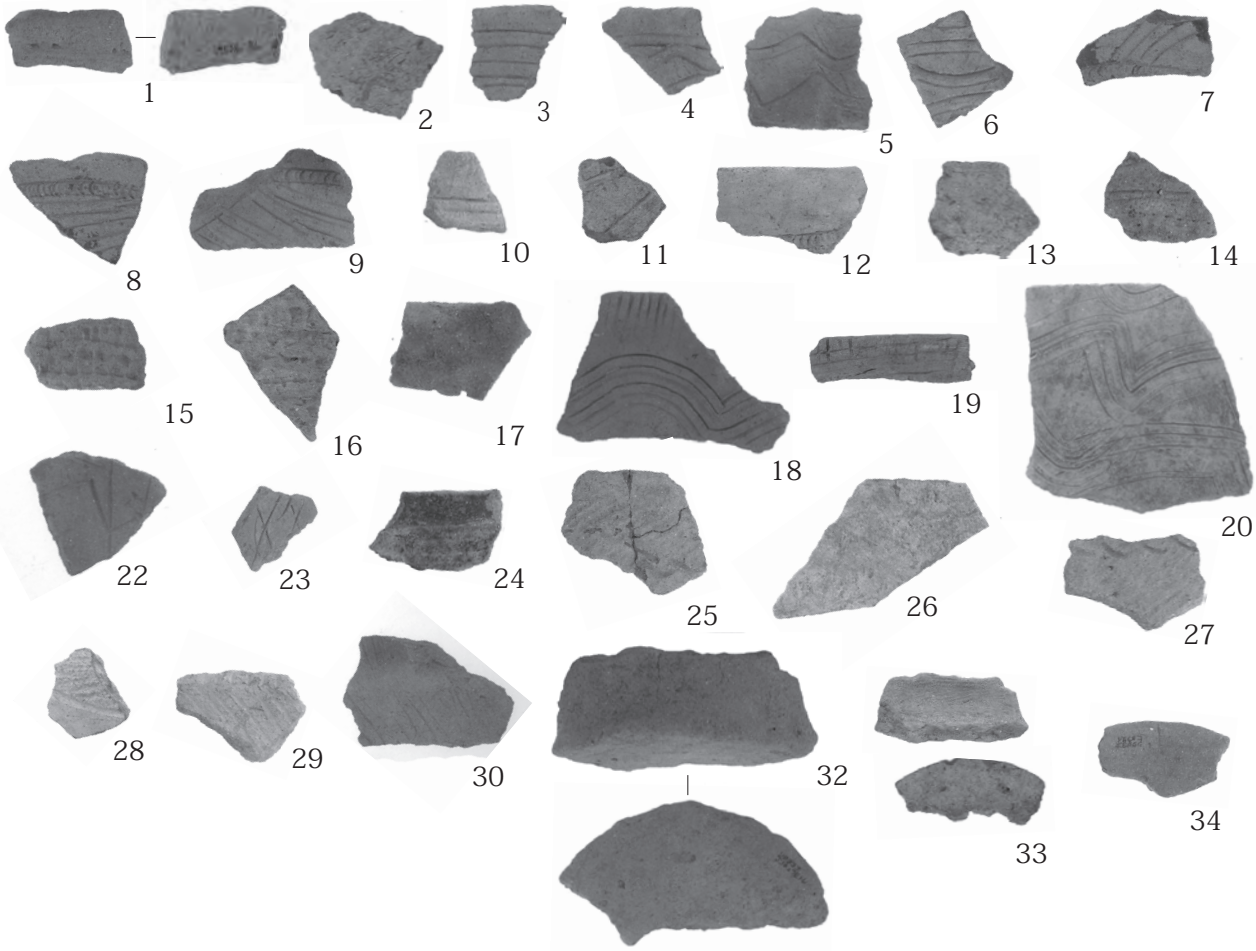
4　5号溝完掘

5　6号溝確認状況

6　墳丘調査状況①

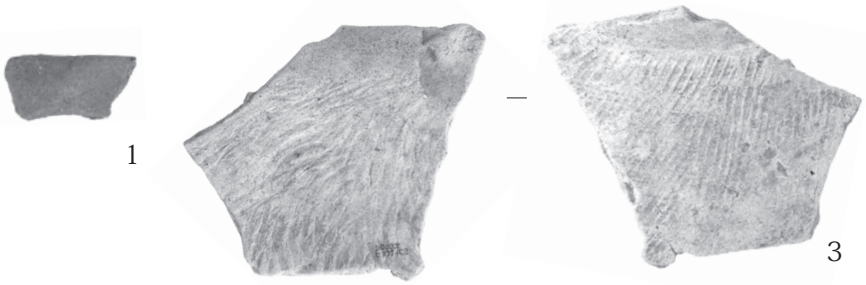
7　墳丘調査状況②

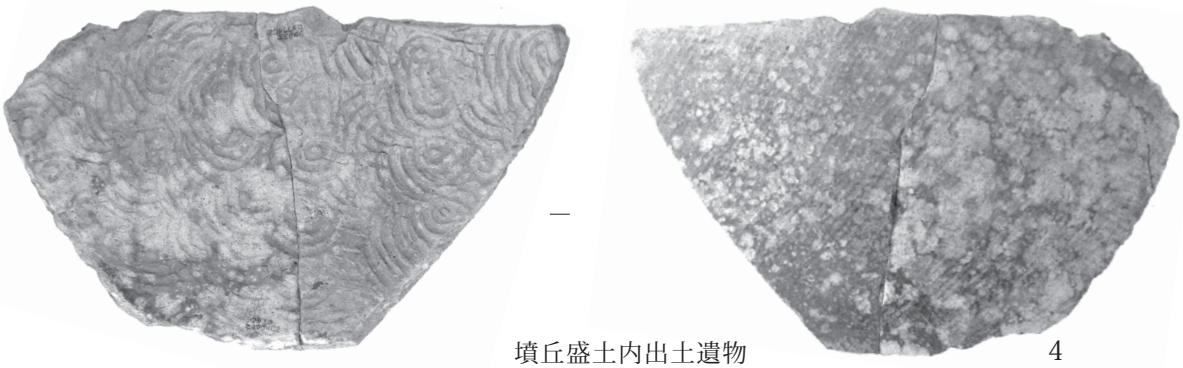
8　周溝セクション実測状況



縄文土器

弥生土器



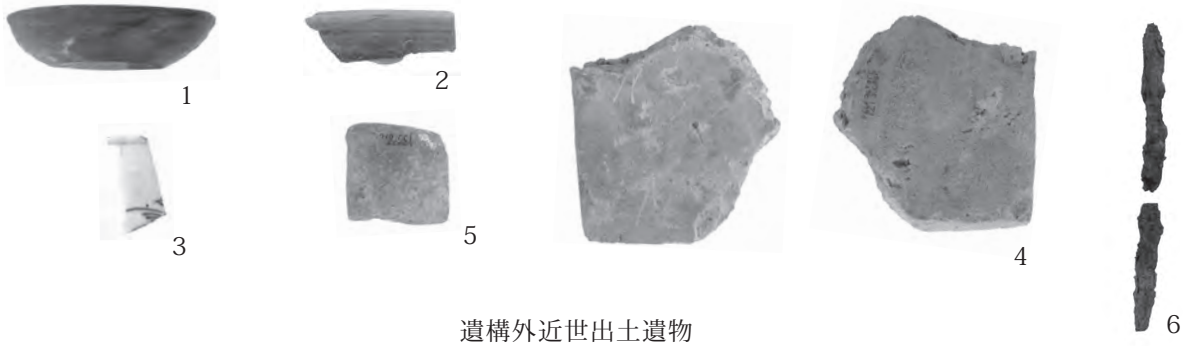


墳丘盛土内出土遺物

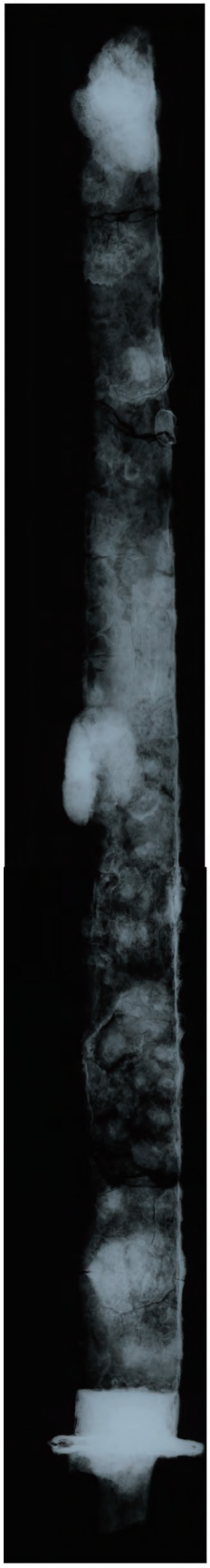
図版10

主体部出土鉄製品

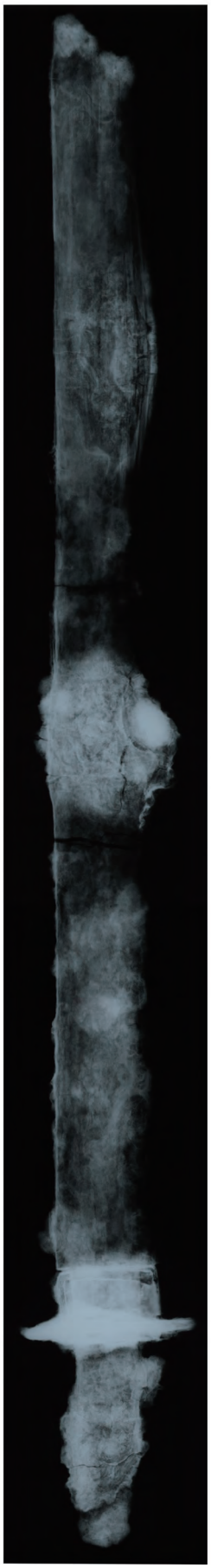
祭祀遺構出土遺物



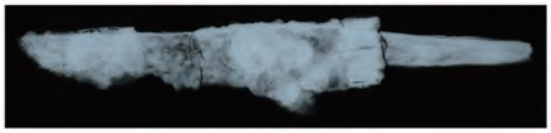
遺構外近世出土遺物



1



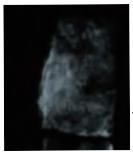
2



3

4

5



鞘尻金具

鉄製品X線写真

財団法人　千葉県教育振興財団　提供

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちばしただいせき　だい3じちょうさほうこくしょ
書　　名	千葉市舌田遺跡 第3次調査報告書
副 書 名	平成21年度発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	長谷川秀久　白根義久
編 集 機 関	有限会社　勾玉工房 Mogi
所　在　地	〒286-0203　千葉県富里市久能238-100　TEL0476(92)0658
発 行 年 月 日	西暦2009年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
舌田遺跡（しただいせき）	千葉市若葉区（ちばしわかばく） 高品町（たかしなちょう）195-11他（ほか）	12104	若葉区-52	35° 37′ 24″	140° 08′ 09″	20090422 ～ 20090615	1,200	宅地 造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舌田遺跡		縄文時代	土坑２基	縄文土器	
	古 墳	古墳時代	円墳１基　祭祀遺構１	刀子・鉄鏃・直刀 須恵器・土師器	
		中・近世	土坑 溝　道	近世陶磁器・石製品・鉄製品	

要　　約	古墳時代の円墳１基の調査で、古墳の他に縄文期の落とし穴、近世の溝・道が検出されている。古墳は中期の段階で構築されたもので、墳丘構築時に墳丘直下に於いて祭祀行為が確認されている。さらに、古墳の裾部から主体部が検出され、主体部出土の直刀は古墳時代後期の遺物と判断される。検出された古墳の主体部は追葬の可能性が想定される。

千 葉 市 舌 田 遺 跡第３次調査

―平成21年度発掘調査―

平成21年10月31日発行

編　集　　千葉市教育委員会
発　行　　〒260-8730　千葉市中央区問屋町1-35
TEL 043(245)5962
有限会社　勾玉工房 Mogi
〒286-0203　千葉県富里市久能238-100
TEL 0476(92)0658
株式会社　拓匠開発
〒260-0045　千葉市中央区弁天2-20-20
TEL 043(309)2011
印　刷　　株式会社　エイティー
〒289-1115　千葉県八街市八街ほ211
TEL 043(444)2024